

俳諧錦繍緞

普ねく巻のう
ちに錦繍緞
子華厳の会
あめうけ法華経
さまざま集
まてまても
元禄丁丑冬

江上隠士山松子序

風雅の天地の雲と春を
玉秋乃峰とそ〳〵時雨の郭　湖春
雪間や寺のけしき格別　其角
ふれ〳〵も稲妻残る雨の江　翁
鶏頭や夕日うつりて　京　去来
殊更なり井端の谷〳〵おほりり　七、正秀
残る雪比良乃山より　大津　尚白
十月や卅日こゝ迄庭芒隅　素堂
垣根破るゝ其ま〻の牛蒡かな　加賀　一笑
殿様のまゐる音して　文鱗
義濃よ　入〻雪共くる迄

山路や分て春立ん瓜畠　翁
初下向
富士共山時雨とも見ぬよすゝき　湖春
牧方の宿りとる迄
馬士も貪ることや春の暮　其角
春かすみいかの宿の貧人を　誰　尾陽
赤らむや一つの梅の古屋敷　荷兮
こゝのすに弁の咄を聞居て　七、曲水
うつし植ん秋の草花　蔓（とくさ）　其角
嵐雪ゝ画ともなき賀の入〻

芳野にまうでかへさ
打ぬらや弓矢もなくて
河骨や終に
揚まき
いつの時人と
神もさぞ
腹のうへ人よみそなや池
兎も背も濡
けうかる我う旅すゝき
木兎の独うそひや秋
よき晩
車まて花見
さうねぬ
紙屑や
通
尼
花もるさ
雪ふり
俳諧
とよ

平田 李由
尾張 西吟
野水
肅山
其角
嵐雪
翁
素堂
其角
嵐蘭
柴雪
山川
すてく
翁

其名
溪下
揚水
善船
仙化
角
石
水
船
化

苔の下まくら阿弥陀仏 墓
ようれん山佛法僧乃こゑ一啼ノ
贋(ガン)もの百首も春の夜乃月
清正ひの船とおもふに已乃捷(ハヤ)
おもて能楽の敦盛を吹
楊貴妃の新もち瘧(おこり)痘(もがさ)いとふ
足入て渋(シブ)をつかふ下女う涓(ナミダ)も
志ハ〳〵寒く白玉餅の米
亭主婦つゝしんで論(ロン)がんぶつ
るもつまらぬ馬船めも音

水船化角石水船化角石

麻のもとうの山もれ郭公
おもてを枝折の伊吹山
旨乃玉の出るはとも貝吹く
宝乃入ル虎ノ尾
あまつ紅扇のたちを
ふくまれ口を娘の名ゝつ
かゝけよう八ツ九ツ切火
江ツ四ツ本ゝ次鐘
御神輿よ流乃音伏(ブセ)蓮(ハス)
かりさもも新もち女房
あひそろ二ツ女びら

石水船化角石水船化角

湧口とめく〳〵かゝる場の層（ソヽ）
いろ〳〵養麦うつ前仕入の榊掛（ソヽガケ）
毬はつ〳〵秋袋売の実
蔀（シトミ）ほる小机お供の
刀を取（トラ）ンタメニ
斬（キ）れおとされ花よこと
酔てわめくうち
春のゆ三十川の
かゞり
俤名残宗もる
碑一ツ

船 化 角 石 水 船 化 角 石 水 船

志げ地つむりうちすてる
ゆうれいの景気
訪（トヒ）て鰻（ウナギ）をひやかす
扱おろし酒
日盛ついと雪路の
細天井の三人客数
銅（アカ）蓮の水を汲（ヒシヤク）ぬく
木乃葉形遣（ヅカヒ）干（ボシ）
夕べに茶入（イレ）ぬ
吉よ精（セイ）進を持
一ツ面ゟ御所の
化 角 石 水 船 化 角 石 水 船

褝ゝ膝ゝ
世間乱る白髪つ
同一文字かく
乱ゝう盃ゝの
志ゝうゑ溝ゝ
一ウタ、二三首ハ景色よ
花乃ゝうよ
卿多つく法師ゝ
道祖の神若
鳳輦(おほんこし)をゝゝ
次なる武者の
角 石 水 舩 化 角 石 水 舩 化 角

名月ゝ徹訶詠の
尾ゝゝ
壱ゝゝ
土佐ゝ歌仙
佛ゝゝ禅ゝ
祢ゝゝ
多療治ゝ
ゝまゝ
醫ゝ
ゝゝ
當日北佐陣ゝ

石 水 舩 化 角 石 水 舩 化 角

一葦の鼓機此
幸時くなくうみ
心をつもそ
出あくと千人和
きつけて乃
落痂乃かくれ
清サ細言
時人去雑俳
白さ及
去うまに
くる先

船化
角石
水船
化角
石六

大汗乃ありさうな
宿をさくめく
癸酉八月サの日乃昼七文葬送の場
ふるき崩心の悲
起なそする獨
一鍬千蝉も
なくみ母を
世丸祈祭
逝すきう
銭金
神丸

船化

其用

高秋もきさらぎ
大名持の畑（はた）
幾世（いくよ）の経（へ）た木立の雑司谷（ゾウシガヤ）
業（わざ）廃（すた）れ
山もて遊行（ゆぎょう）の墜（おと）されば
今産（うぶ）み捨（すて）の声嵐（あらし）
石枕（いしまくら）
幕（まく）の間（あいだ）
まろび落（おち）
錦八

七夕（たなばた）
仕（つかまつ）
あ
目（め）
此（この）
立（たち）
何（なに）

はゝゝゝかゝのこゝひろう
朋友（トモカキ）のこゝひろう
約ゝゝゝもんかゝ
うゝゝ尚ぬる日五十旬よゝゝゝ
を誦経のほ追ゝゝ
尤真ゝゝの旅とゝ

東順傳

老人東順ゝ板氏乃
乃農士竹氏ゝ梅ゝ
毎ゝゝによるこの
の秋ゝ月城梅る

市の人なるべし机の四隅の部
入相や此秋の四隅の部
行草躰　三十四句
悲悲鳴　獨吟　其角
ちんちろく蝦よる涙の秋
並ぬ鶴乃数のすくなり
春梅ころいとの旅人うらやまん
おもかげ寄て汁も焼物
乞食めと世をうらみても月の前
ゆるされつまくら屏風のまな
気もつまるく少夜深る秋の昏

俳諧十一

此白う茅ふき
我ころひそ人の
湯豆腐の
茶の秋冬共寐やうをおもひやり
伏見の時雨の昔しの風土記のかつらき
芋ほりに招ク一客ハ一客ハ咏ル猿
温泉入の通る山路哉　月
花の雪仏ニ調ル供を拘くるり
墓もそろくかし菜の味

寺井見城十里いあり　磬（キン）こえ
　そ歩ゝ蕨（ワラビ）もとめ
年のくれも痛よ餅を入れて亜
　綿をひろげよ息災の祝毎
東國も一夜泊りけあり
　松のもみ〻し水田の雪
吹出しの庵もうぐひす笛の夢
　いとゞ申城乳母の尼よまつさゝり
病牛（カナイ）秋陶の酒
　琴の下（ヘタ）掃（ハヤ）て泊瀬の鐘
五所てもよひ

市女ゝとゝいの出茶屋くりや
　水まる車の沿（ソヒ）て牛の皆
　　杭（クヒ）を突まとゝ融（トケ）ぬく
巻絹尺てもあるく融（トケ）ぬく
　傘ふりてもあるく面白き面白き
十月廿日墓栽於今
　ちるもやこゝハ頭（カシラ）　春雨
廣沢　　夷講　五角
池乃ほとりもみぢ
　のゝみや　こ山　二束
おかしよ入おの清水すゝしめを

加山

清水や涼林寺さそふ我こころ　其角

臨川寺

風の地もて落ちめの作よ　去来

秋ぐ〜そのもの作ると拠のこゝろを

ワけくさの畑乃書

嫩雛浴千隔十石乃人

大井里

冬枯のあぜるみそん愛盃哀　去来

うつくしう

新酒や初茶よりうるもみち時　加生

加生ゝ書のかばうひを

綿加る紙子ゝ

澄上の吟　キ角

帆うけ舟あれや堅田も冬ゆふ

比良乃雨氣尺をよ唐崎海　曲水

遊園墅寺

かゝひるこ井の仁王也冬木立　キ角

芭蕉庵旧州　杉木丸夕附日

ちそ〜〜ちやにし文の古々

千那よ州〜ろ

堅田乃まへらるゝ

婆よ雪手かるゝ

湖を座招ぐ〳〵尺七ん　尚白
よりは和ま月のけし　甚角
蟹のかるう〳〵菜ばう　ヽ
屋中や去ん〳〵仏合ぬふほのうみ　素葉
名月下の七日尚白亭
園ち〳〵客務ふ小ゑか　尚白
椹う〳〵ざよも更の筋　加生
茶師の義掛〳〵て　素角
次
越ろはや船呂ものく　新の色　仝
る船のあり〳〵劇かまる　白

法ろかむ石手駄の洗ふかく　生
ホ
ひろ川松ろよ所よ多浦の雪　仝
駒ろす峯をを入ろ丸月　名
詮よ泰行泉町よ言次多　白
業通の入口よ俳諧ま
力ろろ輩かろ入色
加ろ主定ろるも丸
暗嗚や弓矢をぬ　去来
双ほろろ十銭ろ
ほろくと梨棒ぬの剣ト井　小刀　嵐雪
其角

越のくさめてこ仕てうめむかり　来
打金をもよろこれる姫の元
加ろうも共ふハ酒うこと元
ろ来ふとこのだるうこ元来とう
火燵ハ跳出すろひあうか　雪ハ
ふ形考ふ元限りとおよけか　ハ
揚うかつもその仕へきる　来
形ふし加ふのうのめこと
長ヶ伐ふくべく結ふの川　雪
元ふりうよ各重庭ふのものを　角
柳ふうふ　爰結乃無　雪

錦十五

或師ふ云利休の茶の湯ふあして事を
好むとかうろめれ
古ふ是ふ新しおふ
計ふ是ふ利休さんく不喜ふて新古の目さく
きあさ人ふそ沙汰ふもかしろ
さよく欠摺(スリバチ)新ふとも時ふ従ふ茶の湯ふ
用ふるふ利ふ是ふ元ふ分ふへく
物数ふ成ふもつろ御膳ふも
さのふし旬ふ魚ふあさ人ふ俄ふ
ろ元ふ点ふ水ふ甚席ふ是い長

其角述

是い名珍重ありて一点ありて目利ありて始めて
き初めて成すのおつうき所の
席のきつうきつうき時は宜しく分流ふ
おとく無点共句こともあつて是用心肝心を
、のつうき句こつうきつうきつうき

角　金玉ありて紅のくりけん

船　摘(アカ)ものも折もいとふみまるかや

角　北魯の絵そふふ

船　市供のくもるうろこのり

角　いとぶ志らすの市鳥啼

船　月雲ふ近江北海のあんどり

角　旅行もるかく住る身こ

船　吐くろきをかるれもろうき

角　二日すらいうむ髪の香

船　安持佛ふうしふみそふ毛

角　常住ム所桐のかく秩

船

角　目病そどもつ志ろる郭多郭

船　みうち志ろる瘦(ヤセ)犬の乳

角　山の井北仏仰ふ

船　振秩序カのうふ

角　是をとくろ

船　波の月波ア北泊を志ろみり

角　籠(コモ)ろる舟のふ

船　稲刈ろ初尾まかる北

角　家くくいく

船　市人の肩ふ捧(ボウ)玉くく

角　嚊(アトコ)よ

南風ある 模
[illegible]
[illegible]
[illegible]

数〻(しばしば)辺(ほとり)打(うち)つる 紙鳶(いかのぼり)
御殿(ごてん)の絵(え)する 真(まこと)ならうする 角(かど)
振袖(ふりそで)姉(あね)さま髪(かみ)よりあまる 振(ふり)袖(そで)
いつかある 経(へ)を尺八(しゃくはち)にて 角(かど)
打(うち)風(かぜ)等(など)のさまざまある 庄(しょう)
まゝ事(ごと)抔(など)のさまざまある 斤(きん)あり
子(こ)我呵(がか)る人(ひと)まねする 角(かど)
動(うご)くさま 雑(ざつ)ものの 丸(まる)めるさま 遠(とほ)
文車(ふぐるま)やくのさまざまある 角(かど)
こまの手(て)酒(さけ)久(ひさ)女楽(おんがく)制(せい) 遠(とほ)
沈(しづ)月(つき)花(はな)うつる 角(かど)
ほゝけ 人(ひと) 遠(とほ)

秋(あき)の部(ぶ)
小(ちひさ)夜(よ)衣(ぎぬ)おもふ 遠(とほ)
又(また)の限(かぎり)をも 遠(とほ)
真(まこと)像(ぞう)うつくしき 角(かど)
小(ちひさ)女(をんな)のおもかげ
覚(カク)範(ハン)のいろ〳〵の絵(え)
まゝ事(ごと)ひろう
立春(りっしゅん)
春(はる)も来(き)ぬ南北(なんぼく)星(ほし)の
風(かぜ)二月(にがつ)のうち 露沾(ろせん)
旅(たび)衣(ぎぬ) 荷兮(かけい)

ひるく此日をつゝむ秋の風　翁
まだ雪雨からまん有ふう　一笑
武士の夢おもはるゝ哉　ゟ尺好春

　讃岐金毘羅にまいりて

杉苔やうるおひある山ばとら　松几
雪人や川越手あまの死　櫻麻　全峰

　加州あまの死骸を海

弓もたぬ昔ふり入右ひかた　翁
川舟の笠もかぶらぬ昔ふう　溪石
杭ぎはに泳ぐ氷のうすく哉　苔翠

旅思

うつり山おもひくるゝ秋の風　節夕
ふる郷や蝶も鳥も古なじみ　珍夕
曙やまだ枕元の鶏の声　其角
ふるやあやめも分ぬ五月雨　〃
猫の恋嵐もとをす垣根哉　〃
夕立やさゞ波ゆるぐ牛の門ちか　琴風
　　嵐をまつ浪に　李下
夏ごもりおもひくるゝ柳哉　其角
ちらくと蝶よかすむや冬の蠅　蕭山
蜘蛛（ささ）の尋常ならぬ蔭哉　巴風
おもひ切死又枯野哉　其角

うつゝ共わかぬ夢路さへ　其角

二見への関成ぬ行末

うつゝ共わかぬ夢路さへ此まゝ　翁

明星悟心

面目あり師を八月の　尤風

水仙礼哥に神移る流れ　尚白

尼のみ此尼まゆみ引つゝ　彫棠

ゆふ露ものゝ哀れ知つゝ

我ゆへに侍ふ今宵夜の雪　加生妻

春立ぬ山

春ごとさゝ波ゆるぐ赤氏　其角妻吉

山ぶきやほろ〳〵こぼす岩清水　紫雪女二十七

秋ふかき隣は何を肥る神　高白女

笠ぬぎて通りけり　三

笠ぬぎて通りけり　仙花女

辞世　嘱雲

もえやらで又消やすき我妹　千子

小僧も庭手伝ふ年の内

人さはに雑煮祝ふ元日　角上

旅深川栄ゑ流る犬の声　洒角

はつ雪や梅の風　嵐雪

雨ずり地ゆかしき虫　神叔

初雞やうすき前の宿の霜　今我

角　舟あり船ひきそめ
我　高き水挽く蘇鉄の塒哉
雪　にて句ふ
叔　どこやらう墓度おりぬ　昵
角　蓋くへてまづ此端をする
雪　法くしも無くて暁のゆき
叔　造酒(イセイ)荘(ヤシキ)ふる園の音
我　紫苑(ユウゼン)菜も巻ひぢる男猫
角　うめもりを衣をする神の角
叔　傷づく落ちあれてまま柳
雪　其角

角　我　雪　叔　我　角　叔　雪
　　二三俵引投ぐまま遥人
　　大寺北川幅こゆるもりの汎
　　一小屋焚くーまの秋方
　　此辺戻るまで凡そこの山寺
　　めぬし周こ
　　ふるさとの骨をとの出す
　　雪ふりかかる論のみく
　　角　我　雪　叔　我　角　叔　雪

紫垣うつも老の辟狂叔
うつくうと多督とよ我
とめは成志ぬ亡す角
恥うや陽ナ如よ陽ミカ日叔
狂詩の舩うの大晩角
雪の高飄章の展かうひうう我
田ま鳴さ鹿いあまてうしく吾
心敬の妻話志くとはうけう叔
赤梨此芹ま寒さ党ゆる我
不市ぬとまう蹴立ま花うかう叔
訪の新藤此鈴吉春風角

あ吟まめくれく
角なて男もりけま鹿の友　淺石
はうう此うまの器此ト垣　其角
ふはしまぬ雪の散落う　丶
志うし帆却ふ此の岩狙　石丶
水や宮まうりれ月の新
四ツ此新次く檜の秋風　角丶
等ふ紫麓所ふ月ま意　石丶
木梨ふ月ま麓所ふて仮焚し釜
摩川の海うまうを延まり
上戸志はうう順此宮う　角

髪を児法師と剃
夢ふを毎
帳も篇も出(カリブキ)僧の
読む田路の
重ね(カヘ)の二百町(テナシ)坂
ようき雑の
綿さ馬鉦花ま
何ふ手地
汲ようきいう牙
美人ありも
三世よむ信者と

角 石 丶 角 丶 石 丶 角 丶 石 丶 角

かいきはうさ
糸花やう
さうきは
寄方
感状う
山う高
溝(コギ)
のも(ブリ)
臓の
ちうさ
合おの

角 石 丶 角 丶 石 丶 角 丶 石 丶 角

さ弁も脇ん
ぬあのひ
松坂角ん
きにかう角
あ入く
方
早ミ
増補
毎
五禮も
兵義至
雨

あかつき紀太くおきる角
なつまけいるる女朔の焼物石
花ぬすひを出敬る高くおもひ丶
こそこの年外こそ眠るる着角

七月十五日例の信徳関もつぬ
路通もあり今もそくこれこと
赤松の文をひろ
生そあの人や蔭後のおまつり　蕭山
おせなつくる高尻の扁　信徳
屠所の山もこそ月かく　路通

こそ時こそほそぶ廉の名　彫棠
一附句傘のこそ死するかもり　徳山
持こる舟こあるかなる　棠通
栄儀力ほこあるかこまひなる　通山
寿い女よおりこさそ　山徳
灯史寿のまこそ一意こ　徳通
ゆこよ浦ゆんさる　通棠
湖北こそ死秋のの　棠徳
功もの人栄こ繋く琴除　徳山
利酒年彩両あき月死病や　山
同こくさこそくみこそこく

糸物のうつろひ窓のうつろく
さはることろは秋しいちやの
ひの北虹の立ちそめんこひ山
風吹きそよく遠き関の
夜もそろ更みぬ秋くる人く
うつろふ物の関屋のみやこ
入海ぬそこ深くみやこ
とも白鳥ぬ見ゆる
面合さるまで他郷の時雨
うつろひて幸ひぬる片時の

堂　其角
山　周
徳　山

鴨のみぬる手塵ぬ
北手臥ス枯葦ぬ秋の夕影
屋根音うつろく
ひのそろそろ宵ぬ
鯉のこゝみ吐く月ぬそろ
家をとゝみさこゝ
まみち手うつろく
うちはろ猫ぬ
とりはろ猫の尾をみろ
立ちそろ大さ
うつひのやうに

其角
彫堂
山
角
堂
、
角
山
堂
角
山

政所のかうい
贈
写さくい藪伐
字色
昔の畑伐
春日新いぐり
紙みの古さ
ようぶ附き
此板ひさ
今や掘る鉄

掌
角
山
掌
角
山
掌
角
山
掌
角

こさみの
こさぬ
こぶも楊枝
富
迷惑
養を
こさみ
抜こ
ぬ魚刀
お良い
つぶ素

山
掌
角
山
掌
角
山
掌
角
山
掌

梅柳のつまやう枝打垣　角
小弓もそろ〳〵射るまさる　山

遊清水寺
人乃世やのとり〳〵の日若寺林　其角
布袋の談
大雲院〳〵移住指のゆ所ゝ

越人を伴ふ
木曽の月見ん
おもひやる姨ひとりかも月寒　翁
いさよひもまさる更科郷一の郷ゝ
片〳〵ぬれみいの翁の為ゝ
雪ちる折ふし（カタ）桟（カケ）も目も塞（フサ）がれず　越人（毛頭）
夜を山
鈴もや松風も先へ着もそく　其角
馬の後おりて見さるゝ聖哉　珍夕

戀

扇打ミよちつゝ化粧う那　尚白
郭さゝ〻霧撫ゝ白ゝ梅　山川
星合や屋形出入の舟の音　氷花
　うつゝの客も音聞みゝく
早乙女手ゝ洗さするうねさよ　其角
納ちゝうりの〻すゝ瓜や　雨等
一巡り待人遠き掃の跡　松ゝう
ゝゝ掃の跡ゝ松白し　尚白
出代やこゝろの通ふ嫁ゝ新　行舟
なくゝ下女ゝ粽五把　嵐雪

方ゝ和よゝものゝ
文ゝ紙紫禍のゝ
西ゝ六條ゝ
春乃雪や木瓜の遅の表合セ　泊徳
伏尺西蓮ゝ奥行
初雪や人ゝのおゝ舟　其角
　寒山の讃
霜ゝ恩ゝ門の雪ゝ客ゝ
　秋ゝ紅葉ゝ
十ゝ月ゝ
篇ゝもまゝのてゝ

秋色
小梅ゞ
詩六
近江
秋船
去来

長嘯の墓もめぐるやはらぐれ　翁
ふけ方さ鹿笛聞せよ秋の雨　去来
世の中いとゞ寒しや霜の声　尚白
ともしさを我も火桶に抱つく夜半の秋　其角

翁より侍ること数年おもの院
あるじ申すことを聞て夜半の秋
ともしさを我も火桶に抱つく　其角

杜国
八橋
嵐雪
昼山
千那
洛通

ものうきほどや小盃の酒の泡　其角
為ぬ風情の中ぞうき　嵐雪
あるあるじの心ざしなるべし
おもしろき人のいさま
ゆきあひて一日の友
ゆきあひて猶改の夢ぞ残れる　巴風
ゆきあひて猶改の夢ぞ残れる　其角
ゆきあひて猶改の夢ぞ残れる　風
ゆきあひて猶改の夢ぞ残れる　丶

下部よ法師ぞ見ゆる小田の中
犬もこそ一日の友
捨置る小屋もかまくらの名ぞ残れる
藪ぬ古あるじ昔ぞ残れる
菊さくや酒ある時の庵

鼻のうごめく紙
小坊主の名代寒さ
火打石の冷え
ぬくめ酒へ茶の饅一皿
何が目にうかぶ
ちりめん暗嘯
杜鵑（ホトトギス）
裏（ウラ）へも回す
安養界、紙鳶（イカノボリ）
板塀の外の海
蚊を火

[illegible]風あらかるや　そも
こころ共越の白山やま　幾つ
ものがさねかさなる雪の夢

十二月廿日尿前

おもかるく、旅人探る　梅つぼ　芭蕉
夜こひやすく、老八　影棠
目そらさぬつま　其角
扨感のよう法師　黄山
夕月出代りおそく　桃隣
秋をかりそめ　銀杏

岡[illegible]手なるまゝのひ[illegible]扉の音ト
肩こつなるゝ　[illegible]
足もとに菜種[illegible]　[illegible]
茶釜煮こぼす　[illegible]
下帳の反故[illegible]　[illegible]
はえこむ猫の[illegible]　[illegible]
もろこや[illegible]　[illegible]
硯法花[illegible]　[illegible]
[illegible]曲突[illegible]　[illegible]
[illegible]
まゐるものと[illegible]

雁ん　とをく小遠さそう渡　棠
思ふ和名も秀残秋乃雁　杏
うそみそもの残揚る箱戸梱　山
山を出つゝ多くこゝろの声うく　蕉
初ものゝかゝる谷歓の下閙　角
かけもうい機へる家のいまゝ　山
思ひぬあそ汐裕　杏
気色まく曹洞宗の裏かり手　隣
進ぶこゝみよいまゝを焼ク　棠
尺ぬかれまんく無残ともれり　角
すゝさゆふ汐かゝる　蕉

秋ふかき星の晩けく夜る此月　棠
わゝもゝあ此色もくゝ屑　山
松茸狩迎行秋かゝる沢山手　角
そゝひおみそ下くよ有　杏
南蛮の南蛮ものかよかゝる　蕉
花の名ばくしぐゞ揚麦蛇　棠
生残中でざらく梶の色　山
うそみの新蕎麦誇く三線　隣

八月十八日雨中晻

川つゝ揃ゝの多此秋寒う那　仙化
月ゝ月ゝ雨ゝ雨ゝ雨　其角

銚子よりる花もみ乗合 普船
ゐぐれのこゝち棟上の槌 化
初雪や師走よあめ降色いや 角
雨こゝに年のゆく末物 船
人かこゝとをこゝみく軟む乳母ヶ釈 化
ゐて日こゝ升土夜信仏 角
み雑をあんく降こゝみこ 船
こゝしこゝ壺の蓋の立夢 化
鈴升籠こゝづこゝく施あゝり 角
渋柿つゝ手柱の筆これ 船
好のこゝ王るへいく五香こゝ 化

秋田ゐる手物す兄弟
月よこる利屋鞘師の頃こゝ
雨芦ゐ屋こゝる裏門の蓑
いぶけのこゝ麦俵こゝ初茄子
邂逅山寺八幡こゝこゝ
芋松南坊のこゝ盗人
今升恩よこゝ
こゝぬくやぐこゝ秋自釈
あゝこゝ柳ゐこゝ間ぐかこゝ時
消こゝ升三線ゐくも我ゐめく
いくこゝ都代はこゝ魚ゐ

角 船 化 化 船 角 化 船 角 船

園の茅を焼次のとしの詩
　おい松てまつ迄なる老の小夜　化角
訪ふ秋万部の経に入ふかき　船化
名月の竹田宮ゐる村しぐれ　松風　化角
かいつもながら大汝の時　船化
貫なる戒法の師の衢経　化船
菅う地曳の音も遠く　角化
鳥にもちのさ紙猫へまつはり　船角
さしづめの燈籠のもみぢ哉　角化
初雪や氷る五升雪　化角

柳よりこぼるる蛍ゆひの垣　船
一葉出而一葉巴故為芭
一葉巴而一葉焦故為蕉
つまでも零れ松葉の弐
木槿の外も垣の刀禰
鮫の奥赤い月は角ゆらん　其角
もみぢ一ぱの箱　水
名を付給ふ下の句合しさ　翁
番をすりかへる柱寒まる　角
神垣のしめちがへたる年を惜　ろ
約束のゆの髪　翁

寫色一ま𠮟何よ鬱くもる病
揚よもち汚よ屏風みてる
さ海くよ割くて尺ち紀梨薑
ありげ入よする曲五文菊
月新手板おそる後おかむし
あ仁の草鞋をみけく垂旅
鮒ちもの大服汚ばも犬ばば
まねあ一雪よ指汲
たくんる花柿くく奥の庭
嵐のををみをくはぐくく
世のちくよ寺ま男りも出代りて

水角翁水角翁水角翁水角翁

歌ちくる百姓くよる
おちち郎手カ於綿を落くる
るちもの西手芝肥る原
薑きくく石汚へ滑を探ぬる
くぬよも飛手ちぬ雪腹
志ま志亦つまれ肝いん
袴くむもくくもの去しもや
秋まくく年玄庭のけくれく
いく吉人のおもる医着かく
暗明る角よ産郎を運てくる
谷も柳を手宗論

翁角水翁角水翁角水翁角

利笠の旌ふる雨の風

山旭ふるさと今日の夢　水

ゆく川薬の枯葉を流　角

煤ちくお迫おとる　彭

犬箱をさげ戻のあるれや　あ

揚板をはづして行文　角

甲戌紀行

箱根佐ふみ

杉の上下馬ふみ

秋雲尾上の松をえがきたり

其角

いのかうの三嶋旅中佳節

門涼やこゝも名所ひとつなの菊を折

原田頭

勢雲や富士を一筋富士の嵐

うつの山

うき我や馬も餅くふほとゝぎす　山

小夜中山

乙鳥や子安の茶屋もさびしき

秋葉

合羽着て庵さまるや秋の雨

かしこまる杖を投げ捨て禁ず

三股川

あぢ櫂下翻す潮の色

十三夜演劇

つきも古りを語るまい

後の月杉やさゞ波の庭

熱田奉幣

芭蕉翁甲冑を着給いし鎧

社あり破れ籠うつぶせに

笠もりまかうらふ社の松を

きその石をすゑ

名よりもその松と

きて生ける

興廃時あり

造営功程まち

文政初酉の

雨は川うそ

彫りさ祭主の

内宮

宇治丸屋よ

ちちろなくころ
川よき宿や酒の秋
牙の杖や赤ゐも
御神楽　謹上再拝
たゞ〳〵や小判かゞへて豪の音
二尺　鈴鹿
器よき神酒を谷ごと
多賀ごと鈴鹿の招くしぐれかな
宮川の上り酒迎ひせゝらぎよ
此花を書よめてとゞめけり
市ありて花ありて酒の秋

伊勢ごもり
田を越て
山畑の芋ありてある卯花
川ぞひの宿や若水ごの
莫嗅野店無着枝薄酒
棋沽豆莢肥
句を感ず
ふるまゐの亭主さけの新酒哉
初潮
杉みどろ鈴ごの里ごの七山
大和梅ごごとをそなへ

かけの外うらに出さる大細
川三条が名のもの能きほど
ほそ走りつきくちかくて落て
うみやまの
鮭(アカ)
住吉奉納

芦乃葉我もろともに流る哉

十月十一日芭蕉翁の忌日
追善のうた笈の着脱手
まめく彼旅業よ
思ひ切まいる好まいる止ル

普船 其角 李下 船 角下 船 角下

仲彦我蕉を拾
われ秋風をえらぶ

星合我郭やえを我の庵の初角
節(フシ)〳〵絞(アヤ)よ虫の数〳〵
十二三あるを雁の数〳〵
起〳〵い倒まで下戸をこゝ
川沖や舟もめぬ日も
あるを魚の
蛇の如くなりけり八重薩
いろ〳〵の我猫の墓
中〳〵手幼事(コト)まゐる

花もなのこ　船
新向の杉共記　角
うぐひすを化粧ひ出る高被　下
狐ぶやうくまより和りの雛　船
詞と共に少女の酒盃面白し　角
山くは時こそ沙良共海雪　下
遣ふ月みる被更新多　船
胸の妙すむ甚多僧正　角
家雲やなの大佛　下
穴井の滴を釈く（ハカラ）菜薬　船

（勢至）
ひかりて如と賢よ賞こと　角
一の助ケ来ふ　下
船輪よ尺　船
浦汎よくく柏（イブ）槽の文木立　下
産祝の影をうつすかゝみ鏡（竪）　角
俤我南曾よりかゝる世よ　下
見捨てまい唯秋の月着共書　船
ふ浅茅の市　角
注連のうち沙立山伏ゆふく　船

まよひつゝ夢をたのむる
家の紋縁の調度も恥つゝく
さも思ひよき邸かな 下角
年高のおくる絵もの絵 舩角
片枝を秋ふく風の目の如く
今日晴れまもなく冬蕨 下角
就国亭の名もの
とひつゝ吟つゝ花吟
桐の葉や古月出て今宵七 彫堂
筆紙硯夕立 其角
八川を画ける棹さす 丶

崇　角　崇　角　崇　角　崇　角　崇　角

崇　角　崇　角　崇　角　崇　角　崇　角

三ツ草菴誠をもてまねかるる日
招もてまねかるる柳かな　其角
雨乞脚日半ばや蓑着笠　同
桶の蓋一枚の荷ハス
家椿八重ヶ木槿をうつろひ　紫紅
秋ぐちもしめる京昆布の色　其角
籾摺も早乙女ありて月の庭　イ
樫の木の花ふる雫衣も　同
此誹を持こそ後のたのもしき　角
焼山越へ行ば白雲ヒヤク
京篭の菜はのけしく湧つゝ　紅
月

押さるる人も有けり夜の秋　イ
一ぱいを揚屋の格子ほのぐらく　和
股立とる紙をくひさく　角
中指をいのり給ふ百成の森　イ
雪の白ものや芝生の酒　月
秋の夜も松ふつまでくを踏　角
明ぬ日目くらの里の月　和
鯉ばる簗のひゞき小坊主の笛　イ
芝生すこしかれ小坊主の笛　月
春雨や海苔屋の暮の百ばの脱　和
下着をとゝく　角

月 宝切の女共を召よせ
イ 来るべく醒(サメ)て
ヲ 片あくびして追福
ヲ 一向宗の南无阿弥陀仏
角 借煮袍(にしめ)を
ヲ 諸役御免この櫂(かい)はなく門
月 切飛脚を時々ゆるかす
角 扱(こき)ちらかす書札流
ヲ 十八ヶ寺もあるべくむかう
月 木曽木つゆの月の川音
ヲ 百姓の活(くら)すなどの秋
角

お 行吹(ゆき)の人の世の中
ヲ 雨ふるかと思ふ宿のさびしく
ヲ 再(ふた)たびもいかで世に出(いで)
闇指
其角
山蜂
指
角
蜂
指

お 鬢数ふ早咄しを興ずる
ヲ 散りくる木葉を書て灯を重
ヲ 糸瓜ぶらさげてろうそく
ヲ 蝶のゆき来(き)て押(おす)
ヲ 義士の月既の額(がく)
ヲ 南無ぶつとくなりて
ヲ 川の氷(こおり)を敲(たたき)て
ヲ

初もみぢ　音の二三ぴき　山の蝿　入来る座敷　秋の風

秋風や　むかしの人の　おもかげ　月

一ト節に　かかる高音　きりてより　下ノ戸や雪の　明ル

面癖の　秋もあはれと　いふ絵ぬる

きりぎりすの刀帯てこいぬる

濱縄の目ばかり赤き花の庭

費る日なりけり

角　蜘　指　角　蜘　指　角　蜘　指　角　蜘　指

春くるに　あひの雪ちる　水入れを　洗ひ一半井の門

春雨や　小艶ばかりを　食の中　ふるまつて　おくりぬ

四月の　腕といふ　燈掃やかも　我住ける

小屋ぬしの　鑿時

町うらに　踏つけて　踊ける　月白や雪

梨葡萄　法のさとりも　水さかな

指　蜘　角　蜘　指　角　指　蜘　角　指　蜘

扇ぬ下へ十まる　軸（だし）　誕
ちるてやかこ　ぱう　ちれる雲の脊
ぱう雲の　つま　白山の溫泉（ゆ）　蜂
ちぬまる　脫（ぬ）　あの裳の松（まつ）の明（あけ）　角
大技を花望（ぼう）人もなるこけ　指
巢子かる　ちて　ぬる式（しき）　指
海苔ゐ糸　其角
ゆかちや盃ちの　紫雫
打ちるをめけるこ

荷の撥よ動（うご）　次我
二つあるる　鉋（かんな）　角
表（おもて）紙（がみ）一刀北（きた）の秀　京
英（はな）さんよ　我
けの菊ま　角
包（つつみ）をけ　京
聖（ひじり）つま　我
和田恩（おん）　京
炭賣（うり）北（きた）　角
毛をも　京
ちる雄　我
ちる竜（たつ）百　角

あまた秋ふる　有家鶯　栗

結二廬河邊一

角　角人の裸手笠や雪の雪　吟
吟　柳を洗ふ川を越ス橋　其角
角　百年此屑や花吹よわるらん　沾徳
吟　柄を大事の扇哉　吟
角　躍るの扇哉ふくべ数へうた　角
虫　金具ぢ土をてらす濱縁　虫
吟　もみいろめ代もおもふ家の風　吟
角　角沈まる二の汁の蓋　角
虫　多賀も坂の愛宕青松寺　虫

星おりて汲ム泉圖乃　露
易ちるまでまぬ北樓かぐまで
見ル投つゝ用の切米　用
寺うに貧乏さむ　川貧　桓
祝ひお撰手　吟
下ル取るのうりをかへおもの雪月　角
食ぬきまの山城月も雪　虫
雑祢ぬのゝ櫛ハ鳴烏　角
鞄箱ひらひ凡辺ワ　吟

[illegible] 乳母 [illegible] 偲偲師
[illegible] 墓 [illegible] 植の [illegible] 翁殿
焼 [illegible] 植よ [illegible]
前 [illegible] 嵐 [illegible]
僧 [illegible] 耳を寒 [illegible]
[illegible] 河の鞘 [illegible]
勝 [illegible] 卵の月利 [illegible]
[illegible] 酔 [illegible]
[illegible] 盃 [illegible] 階
[illegible] 酒 [illegible]
唯 [illegible]

湿 角 吟 湿 角 徒 吟 湿 吟

[illegible] 識も [illegible]
初鞭 [illegible]
世 [illegible]
あの [illegible]
山吹 [illegible]
八月 [illegible]
[illegible]

湿 角 吟 湿 角

寒玉
桂花
紫石
秋色

笹折戸の眠うき沢の秋　其角

功者な碁打の上手也　友

もの欲しうて酒の燗　玉花

打裁ふくめて一日うつれ紙　角

四十うちの髪先詰る玉掛の智　色

陣うつり小荷駄の尉と立毫き　和

こうもり小袖を干す濁り酒　角

糸桜とよごれる雑　花

両棲と狀する物の稽　玉

尾張も何せもの作　角

山柿の門はあらんけもの棚　色

雪はさりさりと一労の学問　其角

打毛氈のうへ香ばしき包み派　芭蕉

四隅うつ賞と此手柄　杖

彼岸中ある洞の秘事　色

嫁入の古きを着る　角

米搗乃古きを着る　和

浜風のみちん秋を告る　花

雨蛙芭蕉手水うつくしき

今月や葉も雫あつき山　芭蕉

蔵くやいつて敲くや雪の門　去来

相性体力作因縁果

舎利講あるに十如是乃
ち我四ひろそこのこゝろを
叶のつゝが拾ひ出仏家

稲妻や四方をかけても　其角
鮫の田やそもかりそめの　由之
弓よる争いそ得二俵　角
山伏の旅人よりく方よ入ます　尚白
二つの山二つのひゞん栗升から　去来
　　蕭山
　　角

報

本未究竟等
うゝ移ほはゝめよ岸升崩を水　素堂
内秘善薩行
夕ゝ手かゝえ一ゝ河ゝ永　戦竹
同講のなをゝ等の中月をあゝく　千那
　新月やいりく升昔男山
　杉為升物の銭ゝ　角
有花升あの鐘升撞ゝ入る声　露沾
性のうゝ　芭蕉

多う秋く精の出て岑も丸き月
塩潮の歯白し岑も丸き月　其角
日ごろ捨ゐし魚の店　芭蕉
水仙のもる物をくゝり巴峡の猿ようやくく
岑の月をやもるおぼろ清水　山嶽叫山月落
鉾清もいのちなりけり浜衣　詩
指鋼の歯もしさ山ざくら　や四ひよう秋
ちるもの人裏冬の船よりつゝみ老の果つゝ年
乃くれもまもなみやつゝを魚の店し垂れ
をくる法師のあをきかりけり其幽深香をそ
遠をる迹ゆふくゝ　平　其角述

西行の家
彼鹿を追ふく霊山の會下弓誠投一人今
ゝ津ゝゝ千佛の一数をみるかな誰の家とのみ
馬跡を駿ゝる雲鞭杖をゝて走るまむとゝ
呼人呂頼あるのゝゝ

牛一

馬蹄々秋我誘ゝ学此の家　挙白
雨乃嗜(きざ)なく稲　才麿
名月城型北水も嵐雪ともて
杖手ゝけ納乃　席(むしろ)　其角
ゝゝ小雪舟さゝ雪あの小の雪　丸

弁乃烟の已ゝ新里村　白
変よ賞ゝ番ゝ何ゝ新もよひ　角
山茗祢ゝ手小梁投やる　雪
榛名ある大夫の声師よゝあのゝ　白
あんどんとゝゝ雨ゝ降る　丸
毛を被る已ゝ友とやゝ狐　雪
僧手嗅ます家茄ふゝんかく　角
此女けゝひわすゝ艸　丸
紙をゝゝ先と深るゝ乃凡　白
ゝゝゝゝゝ新渋刀　角
負物ゝてゝゝん遊ゝ　雪

二

酒乃鬼ゝゝゝゝゝ名楽出　白
ゝゝ家ゝる試ゝゝ音の秋　丸
富士ゝゝゝ已ゝあゝ建　雪
新る建ゝ麻ゝ建ん　角
種ゝ物上ゝ手作る老ゝ年　丸
五賀七道乃ゝ事ゝ約ゝ　白
出ゝ来ある空艸ゝ方をなゝ　角
代のゆるゝゝゝゝ誌へ　雪
詰あへど幸サい同ゝ波乃汐　白
休ゝ加ゝ先名雪とあゝき　丸
石焼乃艸ゝ飽ゝる山の彩く　雪

木茅乃駅考み郎佛達
う〳〵盆考為〳〵子孫所持
月考町盛考古の古書よ
来簡の人見よ意乃恥やう
おもひ古ル筆摺曲ケし墨
あか始まる方城付る州抗
尺るあり銭、永
鉄炮の玉姫子幼亥未立
甲製ル根方の雪の装未
山里考花挿梁春まもく
もの〳〵乃者秋若郎凡

角 九 白 九 九 雪 角 雪 雪 九 白 九 角 雪 白

茶毛むすめよ凡せく解よさん
酒たやし貴ル〳〵ねもかう
月郎ル満る追子賽〳〵
光も風を陰明湯のうへ
市祝よ撰もちく伊勢の負
鶲のかう任よ〳〵者未
大濱考猟雄う無成赤杉
うつ〳〵果考考ぬ郎院家
辞ア九松〳〵縄ちあり生
言歩ちう〳〵のか小田原の若
夜ル考〳〵ちの神よ考の表

角 雪 白 九 九 雪 角 九 白 角 雪 白

瞳舟みそ（忌ヒ）す風家　九
蕎よりもまづこの味噌の口的く　雪
とく人むそ帯の挟（ハサミ）目　角
おもする祭の布をおくる出　九
やく鼎（カナエ）くく多語もりく　白
稲竹の雀打とおやの手　角
雪共市賤をもやくさする　雪
さうまくさまよ雪そく活人　白
んもりく川岐書そ雨ともひわく舟　九
まき擔よ白醪（ヲリ）ともひわく舟　雪
蔵りみくまや石原乃椎　角

門の犬赤き白もりゆきうりて　九
的（ヂ）もく愧（ヂ）る厨（ヂ）ふ雪古ル雪　白
新るまつるもら比乃月好朝　角
をぬあ秩とく荒神の御造（ヅ）　雪
十人の塩ふくまさ川　白
菖乃茅手（ヅ）挟（ヂ）の麻賞　九
流くく酒田の柄抄名もおく　雪
東京まきる色少（ヲサ）キ時　角
執筆（ヂ）る禿乃ぞ共散花　九
天狗さもく物かくまん　白
尤（カヘラ）迄の昼い来委久まおく　角

名

雪　(作ヨリクヲ)麓(ふもと)より幌(ほろ)を掛(かけ)て行(ゆく)川(かは)柝(き)

白　下(した)閨(ねや)ごゝろ引(ひき)あけく川柝(かはき)の月

凡　日(ひ)残(のこ)りゆけるに鳴(なく)や鴫(しぎ)の声(こえ)

雪　牙(きば)よ入(いれ)て自我唱(じがしょう)よむ声(こえ)

角　小田(おだ)の秋(あき)一色(いろ)合(あい)こぼす人(ひと)

白　蝶(てふ)花(はな)もあり(ありき)淹(とま)も四乃恩(しのおん)

凡　九十九(つくも)神(がみ)も久(ひさ)しの春(はる)

角　小山伏(こやまぶし)剃山刀(そりやまがたな)卸(おろ)す雪(ゆき)かすみ

雪　ゐる(ゐるかと)餌合(えさ)の雀(すゞめ)失(うせ)そうれ

雪　尾先(おさき)尻(しり)篭(かご)まで春(はる)夜(よ)の夢(ゆめ)

白　

湖風(こふう)の岸(きし)より田(た)よ行(ゆく)く郭山(かくざん)

素波(すなみ)下(した)出(いで)く舟(ふね)も行(ゆく)く月(つき)

向(むか)ひ川(かは)柳(やなぎ)を風(かぜ)を転(まろ)

郷中(きょうちゅう)の嬶(かゝあ)みる鉦(かね)大名(だいみょう)

おもひ(おもひ)ものゝ幸(さち)ありて猿(さる)

いるまじ(いるまじき)遠(とお)椎(しい)の木(き)

候(そうら)ふ雪(ゆき)ぞ杉(すぎ)折(おり)

寂寞(せきばく)の昼(ひる)も作(つく)る宿(やど)かり

ゐるけの(ゐるけのう)

臨指(りんし)我(われ)小盞(こさかづき)

角　雪　九　白　九　角　雪　角　九　白　雪　白

艸乃葉を遊ひありけと森の玉
人を定まるれ者去夜半 嵐雪
多〻〻戸渡る雁よ雁とく 挙白
去侭ふさむ者 朔日彩 其角
凡そ出る酔の陣 古を代を詩乃刂列 才麿
古を代を塗篭の書 白
暮ぬさ鏡匠 雪
一乃技妻の受領 九
箭(ソノ)さく牛の御前の森ゟ中 角
湖鯉(ミヅウミ)のめる〻も浮〻さめん 雪
白

九 雪 角 九 白 角 雪

つ〻と来まひものよて
ろわなも乳探〻すれ岡乃婆(ババ)
寐ありぬうの〻妖(バケ)もの〻新
降もる〻量(ヲ)花乃雪 尼
打の名〻つ〻〻めるよめのか
花ヲ得テ山く石ヲ浸テ流也
清(コヅ)〻の凝まりて吸へく

ゆるし入るうぬぬ雲掛茶
濃茶をのそむくや多乃水上　九
伊勢使素袍を竹よ狭まもそく　白
具足冊よまりあぐや金衣多　雪
大判の名も誇しや金衣多　九
花芳泳生共初嵐の釵吉　角
貫之めをまらん人きいさ　雪
一ツ木の時二川よ人きいさ　白
水る芳洞の摂待きちもあ　角
相撲体ろ年新る自己佛　九
雪月や真田よ似るる元ろ　白

城の市門を前渡り素。　雪
海鷗の汐うけの多榊そ　九
簡牛を胡乃生　角
手やろや樹を放しる汎の香　雪
笑へて時ろ雷の評　白
お休も給事もそこに夕写盛　角
医者手冊りくの腹お　九
我為て乱の笛誰吹ん　白
堰の家ろ森年発けり　雪
ろ附いありけよ散掃平魚　九
春共いろはにほを散掃平魚　角

朝雪あさゆき
あるじ藏梅(サクバイ)漬(づけ)きて喜(よろこ)ばする客(きゃく)もがな　雪
有(あ)るものせよや硯(すゞり)の毒(ミニモノ)の海(うみ)　白
見よ疾風(はやて)蜂(はち)凪(なぎ)ぬくうらゝかな　角
蛟(みづち)のまんゆうのうねる　丸
蓬生(よもぎう)や嵐(あらし)の跡(あと)の古(ふる)衾(ふすま)　雪
あるじ有(あ)れ配當(ハイトウ)のよかりし　角
滿(み)つ汐(しほ)浪(なみ)や摑(つか)ぬく舟(ふね)　白
神垣(かみがき)や白梅(しらうめ)漬(づけ)の古(ふる)盛(もり)物　雪
千歳(ちとせ)の水(みづ)や棟上(むねあげ)の振舞(ふるまひ)　丸
洛中(らくちう)の人靜(ひとしづか)なる午(うま)の時　白
うき世哉(よかな)と誹(そし)る雪(ゆき)の朝(あさ)　雪
夜月夜元(よつきよもと)の乞食(こじき)へ立(たち)舞(まひ)や　丸
赤(あか)こゝろ男(をとこ)灯(ともしび)けす虫(むし)　角
井戸端(いどばた)よりぬく衣(きぬ)あらふ　雪
せめて死(しな)ば彼岸(ひがん)の土(つち)よ死(しな)ば彼岸(ひがん)の土(つち)よ　白
早追(はやおひ)よ馬(うま)やめぬ夢(ゆめ)　角
我欲(わよく)の塵(ちり)汚(よご)す人(ひと)手(で)を掬(すく)ひ捨(すて)　丸
下(した)々(〴〵)の掬(すく)ひ行(ゆく)水(みづ)に浮(うか)ぶ木(き)の屑(くづ)　白

散くる年名残も袋蜘
人も住おく瓦はくろみ
桃梨へ隣のうらも咲乃宝ふる
数ならぬ八朔の鞘
避遷四條寄隣を冷く
新諸白九うる坂家の代
晨明や登り簾の霧霊
一朝添のう獅乃くれお
ちげの精候白佐黒はらくれぬ
花る我語るさ典くの袖
上下よ的美西さお兄为

九角雪白丸雪雪丸白角雪

香炉もるまでなる涙り卵
寐ぶるも白氏文集を讀そろ
年よりう男室乃小壷
酢や塩や池の菊菜を取そへ
衆集帰る岸若姉
利神やそれくる海の舟休め
光るをたくく日若陽炎
のんちりと古紀後河の町續キ
花乃前なる糸桜やお畳
黒髪い衣そまくく
おそとりおくる山よおまし月

白角丸白雪雪丸条雪白角丸

妹ちる蚊の毒を吐ちくとゐる
つ釈〳〵みうすい蓑虫考　雛
宮城野を宮城野と云ふ誤なれ　畑
かく捨〳〵ゑ誤驒走帰魚雷
忘まゐを取仕へ考る弓を射
駕(カ)輿丁(ヨ)先手打もます
衾寒のうちとやせほそき
一夏誠あり〳〵甚雨(ヒ)假〳〵坊
女房を食ふけふも八ツ日影
うさい紗をぬ細工貧〳〵
但残るようやくかけ作り

白　雪　九　角　雪　白　角　九　雪　白　九

名ゐく新参ある子の与四郎
住〳〵とみれもなるず椿餅
うぶまん中思ひ灸のあつさを
寒る朱摩(スリ)こ所へ月の雲
空寒戦起す
紙入の名もゆかしや道芝
啖かく哀みよや
関東乃人のこゝろ底清水
口こりよ世戦つゝ馬簀(ヒ)
ちろひろ養(ヤシ)いよう雪北上
金石のくぐ戦敵くうどん屋

角　雪　白　雪　九　角　白　雪　九　白　雪

我せこがつちの久ん志梶注
万葉集ニ乃人く

手ふきまつる浪の泡雪
川添ゐ窓い明角ふ向ひあひ

青ゝ苔つく夜よるゝ人音寂ん
薬を筒ゝおとゝ淋ゝさ

ひとりてよゝ扱のゝ音のさゝふりく
木綿かすうへ手あゝる鶴

凡そゝ秋ゝ時ゝ夕ゝち
電のゝ去ゝまゝや残るゝ尾毛

李下
其角
才麿
汽雪
苓白
湖水
青井
渭橋
普舩
白嶺

玄ゝが是當ゝ人を産の緒ゝ 丸
名乗ゝ契ゝ久ん壽万歳 角

一ト宮午十二ツ比ノ汐ノ
西ノ頭ヨリ當浦ノ鯨
雪ノ小嶽大嶽ノ時ク
陸木ヲ止ル法乃鐘引
伶乃ヒトリ籟音モ妙ナ
都ノ人ノ夜
妹ガ机ノ時ノ
聖霊棚ヲ
ムク世ヤ
有ヲ蜀ニ
掲ゲ花ヲ
氷花
李下
其角
才丸
岚雪
筆白
澁ノ
青井
渭橋
普船
白嶺

鯨ノ眸ヨリ
筆績乃石ヲ
階ノ如ク
愚ナル已ヲ
波ヲ流ヨ
後愚ノ家ヨ
枝モ先ノ
山井ノ井筒ヨ
リノ如ク
雪ヲ乃ク
乞ヒ
春ノ
重サヲ
周ヲ
猫乃ノ
墨副ル
前巻ノ
燃ル
切シ
玉シ
遊行上人
二ツヨヲ
梅
氷花
李下
其角
才丸
岚雪
筆白
澁ノ
青井
渭橋
普船
白嶺

餅くくほの〳〵狹さ向の町　氷花
三日の日にあなる講釈乃客　李下
小名月をもてあそぶ　其角
嫩ふそ匂ひてあそふ　才丸
あさちふよ法花はやぐ亜扇　嵐雪
ちごくかふたをくゝれ　挙白
逕ろれを入しめる斤打戸　湫水
拝こつけそ。姥う舎利　青井
海祝もむろ汲死車舟　渭橋
雑煮てうふ上ゝ下乃関　普船
膕は侍達ま小ろ死はう　白嶽

うゝ窓の柳窠乃筏　氷花
個ろ屋とうろめるうゝ門いあれ　李下
米の白一茎秋ゆさうなり　其角
半天の二百十日を入あひも　才丸
洋粧のあ乃狸の毛　嵐雪
心中式ゝや胸う花机　挙白
扇のかさあるふゝみ　湫水
夕灯女嬬の足袋て音うれくて　青井
袂う盗むの節分の豆　渭橋
道玄庵屋の多死し兎亜　普船
八乃戸九の戸紅乃花摘　白嶽

大男涼ミ乞棒を つひけり　氷売
梵天ゟ　ゟ　ゟ　

溝つゝ花 月夜の女 冊 氷花
雨晴る 道も洞の流も 杏下
通房 徑ま早苗あぜ 才丸
昼途飯 人の招らん 嵐雪
衣を包む 俗と 挙白
うばゐれ名綿を吸 渭
寐ぬを思ひ庁あぐる 春井
腹立やさのこゝろ 渭橋
図をまく 擂 普船
神輿の牡刈名残 白燕

負任 氷花
其分相心 李下
ウラ一叺 キ角
月乃宿あ 戈九
幣 鏡 嵐雪
疫男の 挙白
鉾起れ門 湖舟
枕把揚梅乃 春井
伝流 渭橋
伯父の 普船
白燕

玄圃より書院を高く乃ちまして　氷壺

登絡すれば　暝乃山　塾筆

ぱりやまと絵のたゞれいなをさわやかに
人乃師さるもの氏もきまへなうう 他乃
このむ所よきひとのいろ色をうつしとるを
するがん為る人のいろをうつしとるを
芝かう為る事あり 乃海苔附ごろ
にきて氏波よきれさるうとく内にこころ
さ〻をおろへてとれる余炎ひとこれをうけ
かのいろ〻くれもきあるかいて原楚
國をわすれすやうれいてこゝろ乃ま
この〻〻をわすれてあもおゆへう〻
ろよ辨をつるやすゝみなや漆園乃書い

ものの國よありてやまと
奈良乃平に情をふく
うるつきえさ〻しき
給ふわと野渡無人船自横
波山なとれたるかゝるあら
きの地を絵めようをこゝろ
て方すを千、手くもの
なき英ものを炎ちしめいろな紀花をみ
すきれよ時の花あり時の赤き一
枝毒よたるに同し形の赤い赤乃書
となさ〻乃ごとく人れ時のこれいう

新年若佛慶とハヤあり八十年　任口
淮やうが形よりけさ若春　芭蕉
先てなるた始ひも拳る雜煮哉　自悦
葉さして栄(サカ)り畑や老乃春　杉風
年の花富士いつ見ても去年ごろ　麋塒
うそうそくう隣をさそふん四方拜　文鱗
元日や家よゆつりの太刀帶　去來
去年梅よかくすくなき名哉古男　擧白

先〳〵の餞うそ寒日う那　泊蓬
蓬莱手児詰(ビ)かな　山店
拘む雨も花をさそする　魚尻
鶯や雑煮も里つき　尚白
松もとろの春ふかまる日和ふ　千春
物も我うれ古なうまに日ふ　観水
日当春をさすに鶴の歩(アユミ)ふ　其角
草まくら蒋うつ人時とそうん　山川
松もとり〳〵七種ちやすあしふ　如泥
総角(アゲマキ)うたに〳〵手篭や蓼つま　野馬

遊大音寺

枡うまや食の家も乃ぞかな　其角
掌の梅杓を寺ぬす　文鱗
梅の花義経ねりし姿うな　曲水

老懶

蛎うりは吾を老の貴もせて　芭蕉
落乃うほうほう寺人の泳かれ　嵐雪
古草や新艸まつ土筆　文鱗
よ〳〵み社を薺花さく垣ね　芭蕉
春のまく〳〵川過去さく根芹ふ　冬市
路〳〵の束(ツカ)のてもち風於茶うれ　泊徳
玉ほこ乃縄手あかる杉菜ふ　全峯

つゆ〳〵と焼野にたゝる蘭(フヂバカマ)哉な　由之

春行

昼乃綾筥未きゆる雲うれ　仙化
ふら〳〵と蝶お蝶哉　治蓬
白魂ふけ越まあむ片帆うれ　紋水
村の鶴つくたにたゝるかすみ哉　巴風
巻付く簟(カンヒ)をほつかふのすゝうれ　野馬
寒食乃烟まされぬうすかな　青丘

同遊とかまに誰けん武蔵野の月
日の波を誰おくに
といつまつさゝまの村せんとおもひく

杉苔や廻乃ありし海そこの貝　不卜
浦おくや籾の扣ふ昌る春の雨　峡水
かとりすゝ矣
巣のあるへり　村雀　峡水
板久の一枚うきもあるを
滝月ふさこも矜ぬ情乃郎　同
中山の塔をたのやわらく
廣さ野乃塔みよとや森ひとり　不卜
宿かりん志登をおろす雪の
旅行　こゝろ　しおり　琴風

のどけや鶴乃(カ)巣込賛かくみ　半殘
巣ごもり笹にも雀うれ　舟竹
すゞめにも肌なろうき娘な　三園
雀子やあらし障子も盃の数　其角

結廬在人境

夕日影町(マチ)に飛こそ哀
そうそう妻もとめぬか小蝶ぶ　曽良
世よつうそう月の雨なしぬか年
肩(カタ)絢をやすむる蝶の秋ふり哉　巴風
青柳もいよ〳〵暗るこそうれ　嵐蘭
ぬすびとに見をつまれる柳哉　衛門

まをあけく児うれ　魚児
曲ものを曲をきかせく生がめ柳哉　其角
おもりすつもくつを跳らるる猫あり　同

妻もやと遠(ヲヅ)尋くく市野猫うれ　魚児
哺を分る孤(ミなし)遠(ヲヅ)乃もろ〳〵哉　観水

春晴

波つく〳〵虹(ニジ)をけする蔦うれ　其角

重三

不(ウヘズ)慶女乃雛かつくる多能
雛こそぬ家も女の信乃者あり　嵐雪
　　孤屋

小式部の古き世を離れ小神うな　紋水
所〳〵乃顔こゝろ桃乃宴　舉白
もゝかしや離れ小盃　其角

いもことのまゝにこゝろく

世古ゐる〳〵我酒乃ん　姪う雛　其角

草庵

花乃雲待ち上戸う浅草よ　芭蕉
鸛の巣もみるく花の紫式　同
木ゐるより花のまよひのいんこ共　風虎

ふるさとをこゝろこゝろにふるさとむさ

獨もゆく物こゝろ乃花の山　文鱗

そうく〳〵ようの花乃八洲も狗の中　舉白
花折〳〵と君乃意あく〳〵いうくせん　仙化
さうさうおく〳〵恭しみする花乃ん　安重
何事に人走陶〳〵ん花さかり　由之
花うへくそうの庭の渡なをすゝき　巴風
朶ふむも花の日影いろ〳〵　魚兒

宿借乃花こゝろ

花盛古ルもろこしを石帝り

詠唯一心　七人

ふるさとの人のおもかげなをそうタもれ　萩露
妻こもと幾人杉もの花乃ん　觀水
破笠

永年乃若ゐうら
毛を吸て人を懐く産る哉　蚊足
御靈屋へさそう入あひ乃花筵　卜千
あしおろや飛あるく蛍の山　嵐雪
去来妹
去よあるめ憂世男乃惰き哉　千子
若ふく母よ乞食の児　其角

日々醉如泥

花持く市乃礫（ツブテ）手あつそん　同

睿與

川ぶて鯆（ウグヒ）流る　露沾
黄精（ヤマノイモ）あり峽（カヒ）乃新　其角

春を問鸎（ウグヒス）を疑ひし　沾徳
壁ありて餘寒を殘る白雪　嘉荷
月冴て梢乃椎のつめたさや　嵐雪
人を見ひく袖もまし　虚谷
作（ウ）藏乃淋しかる新あらめ也　角

初秋や意なそぬ月残沾
蓄（きりず）薬落く小哥あるへし　荷
樓おりうあるる曉乃雁　徒
鼈うつ田中の月夜悲しくて　谷
俤そまくる備の振袖　雪
思ひねを揚うる風涼し　沾

三多し浴(ユア)して夏を忘ル、　角
我鞍(クラ)手蝉のと啼(ナク)ころ　徳
砂吹上(フキアゲ)し垣乃松風　荷
燭(ショク)ともく〳〵も寒(サム)すかな　雪
小乃孫生(ウマ)来(キ)て光(ヒカ)りけり　谷
濃(コキ)墨(スミ)ナ蜾蠃(スガル)もかくる羽を洗(アラ)ふ　角
氷を涌(ワカ)し遠寺乃窓　伯
うれさをそ夜(ヨ)の紙(カミ)こそ　荷
東(ヒガシ)手来(キ)くる人もまく〳〵意(コヽロ)も奥(オク)　陸
常陸なる板久(イタヒサ)ま乃友(トモ)鶴(ツル)　谷
矣(ヲ)手懶(オコタ)て江(エ)の舟　雪

杉苔(スギゴケ)の石乃多(オヽ)き　伯
風夜(カゼヨ)〳〵ま寒(サム)き雨を吹(フク)　角
暗(クラ)うして月(ツキ)乃隈(クマ)なく　徳
御廟の湊古(フル)ひ荒(アレ)ぬれば　荷
角切(ツノキ)〳〵禰宜(ネギ)も放(ハナ)ち鹿乃妻(メ)　雪
鉢(ハチ)を食(クラ)ふ〳〵笈(オイ)を並(ナラ)べて　谷
山(ヤマ)おろし〳〵笈(オイ)を並(ナラ)べて　角
雪乃朝(アシタ)ふる溪(タニ)を人(ヒト)として　伯
答(コタ)賀ふ(ガフ)ように毒(ドク)のある音　荷
萬葉(マンエフ)ようの名所(ナドコロ)哉(カナ)　徒

霞こめ野もる又岩城山　雪

日當午

肌なでかぜ落る梅哉　蚊足
朝濶襖手つゝさゝれ　湖風
日ぢうやおもんみ尽ぬ山桜　文鱗
雨そゝぐ地曳網のあるー哉　由之
一すぢに芝ふみかすぢゝ哉　全峯
歳ごもりひとゝ桜のあるー哉　野水
二歳の山ゆゝしきものゝ山桜　択風

酔のあめる夕さゝら　自悦
ぬるゝてさゝら　旦藁
銭士乃誉ゝめゝさゝ桜　嵐水
禁札の名ゝり寺乃さゝ哉　しゝ
石竈もさゝら荻しく夕なな　松江
玄徳人ゝもさゝれ　狐屋
さゝら乃人ゆもあゝぬ桜ゝる　野馬
抱ゆゝ指をのゝく内九ゝ　魚児
剃髪
西りの水ゆめ　荷兮
勢田暮望

山さくら咲を泊瀬と舟出哉　其角

仁味夫

電のやうに手折ばや春の花

田今つくり名ある花のさくらかな　択風

誰幸ぞ多くある花のさくらかな

釣臺

舟季ん洲濱乃芦の夕日かな　泊蓬

山々の霞る雫く端ゝ那　冬市

山吹をかざしにさせる蝶乃羽哉　濁子

さくらかざしまさしく女松生うつゝ哉　羽笠

やまとうた女松生うつゝ哉　尚白

あらたふと乃字を本かくらん雫山を散すのこゝろ哉　泊荷

咲ちるそれ〳〵乃人まち　宇齊

木蓮華破れ易くも見ゆるかな　破笠

さくらもちや山吹のそこ〳〵に　文鱗

春朝　三園

鄙ありてくらし買ん鮎まさ乃　素堂

春夜　嵐雪

手の時おほつかなしや茶摘歌　牧足

禽そうれ乃瑞垣を
岬着を詫ける
永き日も轉(うたゝ)寝の
原中や物ゐもつく
とそ
啼くも隔てる
鳥帽子を垂乃
山を焼つゝ的寒く
先けうと〳〵網
水多や庭のうけ乃
揩(ぬぐ)ひ清〳〵白ゆの

其角
芭蕉
同
孤屋
野馬
其角
屋
入魚
馬
角
松

禅僧乃赤裸なる
李白ゐ墓
俳諧の誠かく〳〵
雪乃カ
梶原や猪渡る
男手訳〳〵ぬ
さぬ〳〵を盗入ると立さらぶ
〳〵ゝおかる髪(もとり)
血乃涙石の如篇乃朱をはて
奥の拾ひ拭
降くる毛まあく

屋
る
角
屋
る
角
屋
る

名

月夜の雞子乃ごとある
せきれい鎗倉にありく陳基 角
眺ゐる遠さよ 角
物ぐるおもしろき薬ばなもある 角
玉ぼこのみちの角入てより 角
親に鬼子ハ口梅しの蓑虫ぞ 角
おりけるん月の灸月 角
唐犬(きび)乃きらぬ家の吹あひさ 屋
四手懸入る門乃中 角
うら枝す彼の岸陽の雪 る
葉すゝ彩る秋除百孔玄 る

珠数川のあるり(サヽ)寺乃そて 角
あさ紗物乃うさて所うる 角
被(カヅ)衣ぬの衣を犬のともん 角
うるおうさる藪(ヤブ)乃切ぎ 馬
五月雨塗(ヌリ)す荒ま 角
海乃夕ぬ大津さりよ 角
思ひ乃物笑ひまー毛の隅 る
はさまる摘(ツム)む麦食乃皮 る

續虛栗

夏之部

夜錦集

伏見西岸なる地蔵尊を詣侍りて

奉尊手油のけさを燃る根芹　意朔

蜀魂啼て背を越ル雨いし　暮角

郭公なくさく　芭蕉

湾舟や犬もこゑ有夏の夢　其角

杜鵑旅ゆきけふを殺生石　杉風

書を借く旅ゆきけふを殺生石　其角

る九間妹よひくせはとゝきす　杉風

時雨一夢中

待乳山三句

舟場をさゝく来ぬる夜こゑ　如泥

夜ゝゝを敲多う太鼓の祝　其角

ほとゝぎす次妻擽明ル　鼓足

蚊足手をもめられて

郭公変つく飼ふてふ青蠅の乃を　き角

ゆるさるゝ

川風や衣手ス揖ル捨ゝん　角

擽ル捨つゝ多皆童かな　蚊足

初秋乃雨をりて月もれや　同

扇陰ニ日記を捨る関の戸　角

萩のみち 所乃土城包む杉 足
僧と咄し子も皆静かなる 角
瓦工あつまりいそく入相の 足
神鳴つゐに雨を誘ふ 角
杉ふるの狂惑つゝき命哉 足
鴻原近き吾草の庵 角
悪啼キ ふるきぬの髪惜む 足
江を霧る亭の燭燭白く 足
る西信濃の秋風 角
老盛梟ふくへふ首を尺て 足

勇士の土産時梅を折
美女乃酌日長けまも暮安
契めし〳〵住吉奥乃絵を書 同
或いち〳〵住吉次ゝ遣され 足
を食手馴〳〵安き世を知 角
町〳〵二季うつゝ茶筅賣 足
夜〳〵飛田の新くけり 角
高灯籠枝乃撥あけて 足
晩稲花さく湖乃隈 角
蜻蛉乃一かさまに流れ 足
隣ゐ〳〵へて撥の糊ひく 角

通りかゝる冬の驛乃夕あら
降つもる雪の玉味噌　角　是
釜かけよ松の扉城あるじ　角　是
友故ゝ訪ゆる風ぉ倫ぅ　是
頼あまた都の友ぞあつめ　同
豆ひとつ数も人よ笑いま　角
世中乃巻ぉ駝のようかひて　角
寺ごもりせんあるじ春の日　是

妾在閨　十八句

眉帚乃森うつ曇ル乃白う乳　巴風

螢浦よう帳の裾とく　仙化
おとゝぬ二つ床ぁ碁笥ぉ枕して　き角
袖口寒く煙ぁ炭を次　風
旅人の銭よむ音を夕暮　化
かちうを生んぅ秋源し　凡
隠家や坂垣ぇそゝむ名を問　化
傘持ぇそゝり　凡
滝見ぇて乱ぅ髪のあくやうぶ　角
山鳥うすおろ乃盞　凡
花の宿猶ぉ月そゝぐ　化
襲ぇ月上下ぇ影しの妻　角

殊更（サラ）に舊雪かゝる門かな　　風化

ひそよ出口の茶の音　　角

道心みかく志さば高まらん　　小佛乃岡　風化

泪（なみだ）ぞ一鞭（ムチ）の数　　牛の角

薄（スキ）とり埋く遠山の腰　　角

胃八日母乃ころ南りける

方（かた）〻ゟ衣うへらるゝ卯月哉　　其角

初七ノ巻いまだ終らず

夢ゟ覚る母をかく　　山の部云

五七の日追善會　　同

卯花も母なき家ぞ　　芭蕉

香消（キエ）のこるみそさゞいの夜の雪　　其角

ともしくの雲城尺ゟの月淀く　　嵐雪

各悼

卯花ゟ団の腔（ふくろ）和（やわら）ぎ日数ふる　　露沾

数のあるぬる〻ぬる〻別哉　　枳風

眉ひそめく西ゟ向ふかりがね　　治徳

物あまたある物（もの）の悌（なき）入て音（おと）も　　挙白

夏草に活（イキ）くる光ありなむ哉　　嵐雪

数遣（かずつかい）ありきて香〻ゟ梅〻ゟ　　政足

去来

半部や夜着ふるき風の音　野馬
炭ふの笠もちにうつむく湖ふ　全峰
おもふ人ありてやまさき被ㇾ戎　魚兒

　半のこ初ふ笠のこ乃ふに
うくねのゆえよみふる劇ふな　其角
　ふ乃笠ふ手ふ戯ル

下部笠ふ解くるふる日や佛　嵐雪

端午三七日よあつはれを

豕歌うふうふ魚ふ乗
何古ふふも菖乃ふふふな　其角
急き起て菖かふる日向ㇾ　紋水
　　魚兒

菜ふ　や鼓さすの男共　枳風乃書
儀ふ女姉ふうふ家面ふ乱　影堂
ふる手乃る侍清し　花鼓　仙化
白衣ふふ引もふふ夕ふ　魚兒
花菱ふや蘇二ふ女垣の内　泊蓬

禾村

筍よ弁ふふ奥ふ犬あふん　其角
筆やかり度の家乃隅ふも　嵐雪

自詠

髪ふふふ容顔萎ㇾ五月雨　芭蕉
当ふふくふ二日月待ㇾ五月戎　去來

さみだれや溝より溝へ水の徑　沾徳
ぽつ〳〵と雨の雫る目鏡哉　巖翁
數盞に嫩を乞ふ田植哉　巴風
合羽着つゝ友と別るゝ田植哉　吼雲
妻乃郷やて男田植の女の中　其角
夕凉や桐の着する平笛笠　野馬
雨の見え早苗に休む燈籠哉　冬市
　暑さ見やりを乞
入あの雲の司乃ひぐらし　観水
ぬかるみの此田植哉　不卜

都尽ん小桶よ勧る乱り情こそ　高政
おもてのうす水鶏も老を敲りの　濁子
繪扇もむすめにうつる柳縄哉　玖也
月も入我等も出る柳哉　風虎

甲斐山中

山茂乃村とぐいに団るむら弐　芭蕉
古寺や僧なき先うす桜桐の宮　三園
むら〳〵とみのもとにて
世をとへて安く茂まる櫻哉　自準

田家

むま〳〵て蛍うるさし夜乃月　択風

法ども放ち捨てほどろに
暖やかに炊ぐ煙は
消ゆるともなく芦ふく
雀起よ人ごとまうで営の朝
暁乃衣手 秋ぞ寒き

太清へおかしく
山里乃蛍も昼中に合ひ
かやり焚く
おちの人涼寝
旅ごろも香わろき
灰あるや吹おろす
秋乃夢

魚兒
溪石
野馬
孤屋
觀水

去來
黃吻
千春妻
綾戶
去來
卜十

啞蟬乃ゐぬ地を
洗濯の神事 蝶々夕日乃丸

杉風
杜國

土さへさけてとまるひもも

蠅追手妹売ぬ乃や爪作り

其角

かく丞ぬ京山里乃爪の味

翠紅

成合ふ松法せぬ紀日なく

李下

復北日の入あのつく崔乃

歎心

旬川の日よ社まつほす汐揚弐

好柳

誦錢神論

一文乃銭いとあや衣の水

蚊足

越えて赤とる清乃弐

嵐水

令歡木乃晩うそぬるき清水哉　仙化
さゝ死蠏尓くちひのほそ〳〵の出　芭蕉
そゝ死汁きりにさそふ山林のもゝ
作なけふ小野の小町ほれ小町　千春
虫もむ打(カラ)空(カラ)打(カラ)のほり高き附
山鳥も赤うそ紀尾井の木立哉　千春
徒〳〵らに貝ぬく海士を哀とや　其角
陳家よ樹をすく人のうゑ出ほのを

涼しさや愛宕も低く更る夜を　観水
涼しさや雷も夕間　香　去來
旅寝する庵乃うら涼し　冬柏
暮ゆくや祭も過る夜を涼し　由之
奥刕馬塚にて　盧谷
涼しさや鬼こもるとも夕すゝき　維舟
源義経平家追討の時上洛の節馬を納置給ふ所也
あすもまた君をぬんたれ夕すゝみ　同
逐涼二句

涼しさや武蔵野尽る園乃まがき　其角
雨後　文鱗
つゆさくら水もの〻ひゝき蓮の花
蓮うゑて師の閑伽包ム清水哉　野馬
尺ゝはな麻刕笠ゝかな　卜千
昼寝する軒の葭簀乃日陰哉　全峰
ひるの月の花ちる蝶乃白さ哉　旦只
動る葉や猫乃糸巻なるおもひ　破笠
山ゆりやおもひ胡氏乃花の姿　其角
江州よりかへりて田郷　濁子

干瓢をたゝみて却へす　自悦
法そくや日陰のすゝる角豆垣　鈎雪
一花をたゝまぬ筋あるさゝげ哉　虚谷

卅春や彫流しする合歓　巴風
夕立や秋春しらぬ雨　仙化
夕立や筆も干ス粉ヵ　僧宗汎
夕立や産安ゝく明る音　其角
夕立や生ゝ邪　治蓬

午塾
病ム人をおもひやる土用哉　蚊足

鎗先ゝくつゝれる雨干　去來
うつねや揚屋の灯ゝ雨干　其角
或人所持の杖ゝ
何も彫ル我カ頭陀ゆくろ皮袋　澤庵

續虛栗

秋之部

日まるうしなひぬなやみの牝男七夕　風虎
天川あふしも牧屋と明ぬ年あり　自悦
星合や聲女も彩ひの糸とらん　嵐雪
檀を星にわるる秋うれ　檀花
蚤計や舩引とるる川　綾戸
大内ぬかるみまつり祢星まつり　千子
星合やおよこまつ、猶かるん　壽閑

旅思

七夕まかるうしなひぬ旅の祢宅哉　由文

星合や女乃まるうしなひぬ祢い乃ん　其角

贈檀花堂

蘇よ曲ル念ひ乃一つうれ　露沾
蘇や礫乃日彩のうまにく　敦足
蘇い二人なる先うあうる哉　杉風

驚夜雷

うた時うく蘇雷手潔し　其角

寄李下二

いなつまや残るまにとる風丸紙燭哉　芭蕉
いなつまや楽山まのあゆひ川向に　岩泉
いなつまやおわうしなひぬ鼓のむまうれ　湖風

いまだ月をそこなわぬ雲の形

遊女ときわかうけるを
いくそ久しくあひなじみ
ける人よ

露烟(けぶり)も世乃(よの)分(わか)ぬ灯籠(ともしび)の光哉　去来
父母乃(の)家(いへ)なき人の数を学(まな)かたおしうり　由之
名ら魂乃(の)ありよ栗(くり)ら嵐哉　全峰

魂棄をにくむ衣

女餓鬼(がき)すゝ盆(ぼん)舎(しゃ)ても門乃灯籠哉　文鱗
盆もていま秋なき　嵐雪　文挑

魂(たま)貪

魂やうん祭ゝめ宿う恥(はぢ)さ　牧足

對愁

さよの月一人や隣乃玉ゝ　其角
歩ゝつ門乃元食の祝うん　同
送る火の山いさのゝ弐　観水
朝つうん浦路うる舟玉　苔翠

志賀の花堂

さゝ波のい中ゝ鵜(う)飼(かひ)よあるさい島乃仲ぬうん　自悦
首尾(しゅび)を舳(へさき)さゝ玉火う春　去来
　　春雷

吹よせて江乃一隈や水と雪　苔翠
さゝ舟もとゞめぬ小雨の礼　春雷

禅師よまこゝ
おきつれもるものぬ一如帚花　文鱗

遊女の雨もりけるも
いさゝ寒し衣乱のかさ共萩かん　同
女帝の忘のこり桜乃花形る　景道
下駄を引ゆきし比乃一葉哉　冬柏

常陸へ流る種芋共　全峰
牽舟のあとに起し
花の秋草よこひあく整る哉　晋子

萩原や一村ゆかし山乃犬　芭蕉
旅宿
木撰伝花見に寐入りう　観水
入湯乃比
夕萩のはらへんう一夜湯彩哉　紋水
木賀山中
秋うれすゝきまで敲ク雨　楚白
鶺鴒の尾にある山路哉　同
山茶ゝ南鯛ゟ秋乃ーゝ礼哉　紋水

兄去来ゟ件
伊勢へ指ける
初旅のうしろ詩哉

伊勢をうのようねうつ　女千子
柴の戸もあけ雪もちかぬる　同
うけろみの面をよこ切　沾荷

聽閑

簑虫よ声をしぼるな　芭蕉
　　史邦
何も書もなく稲うちらして　嵐雪
もの〻ふをまたとる草の一つゝ　沾蓬

聖護院の宮覚法親王
　　入道
峯入や宮をわくち北嶽越哉　宗因

かゝかの見るもてゐす　其角
刈稲酒やほろ〳〵竹の筒　盧谷
さゝ〳〵さゝ鳩ヒキ野水
善光山寺を麻乃すそ其角
笠とり〳〵富士乃る　盧谷
秋の野や尼ひとる小鳥　野水
世事やわすれうへて四十かり　紋水
　草庵乃月見　盧谷
名月や池をめぐりて夜もすがら　風虎
雪折〳〵人を休もる月乃ちな　芭蕉
　　同

ちかう誘ふ月尺ま
名月を戸ぬそ又も寝ん名残
月尺て蚊の声よ
壱人も笑てもゝ尺ま
月下獨酌
月尺ま哉式アま
月露も薮切ほと
雪見しも東むく
壱人とあふひなく
月尺ま哉
指の人月みる
や木曽ぬ猿

同
択風
李下
観水

蚊足
巴風
去来
野馬
孤屋
破笠

宗鑑ふ
貞室ふ
古襖月ふ
昭阿ふ

文鱗

月のくまひ我里人の
月はふり富士いちの
月満て掬于うこ
育ふり唖のかくゆ
名月や帥堂ぬ鼓
良夜雨意

去来
冬市
由之
去来
其角

つくようひもこころぐるや十四日　同
翠嶺の三な月尺こそ百丈なれ　彫棠
　月撰人ヲとらへ
閑る狐うそなまめく朧の月　塵谷
赤裸の墓く月いこん　魚兒
商人も尺こそ百丈なれ　文鱗
名月や露のひかりある土葬法　旦只
名月を高なく鳥の乱音あり　濁子
おうけをこうしの月は影うす　敝足
中よ出く月一筋や雪の雫　似兮
名月い沙よなうく小雨哉　吼雲

鉋ぐり　一林
名月やうぶ名月の朝和歌到ぬつくねんと　如泥
秋の秋さなく寒さうな寐覚哉　約叶
一寸さうり稲も出ぬ雨乞ゐ　李下
旅空ふく雪をおもひやるむほうになる
けふもうんうんうなるうなぎ
秋芳野よ寝ぬ旅の中うち哉　女千子
もう秋を旅くさの花よおもひ　去來
寂かうく寺なくなうり雨ぐもり　破笠
旅人や村ことに雨さめる哉　全峰

山里や礎(きそ)のかくるゝ迄て　杕風
ふた法て志ぐれ去ぬる跡　山川
ぬるゝ迄火燵(こたつ)をはなれぬ礎(いしずえ)　牧足
ようよう奥にあるじ
ともし火や坊ゝの妻　芭蕉
ふるゝ迄ゝ守(もり)てゐるや　同
燭床
ふるゝ迄ゝ守(もり)てゐるや　同
秋興　廿曲句
面白く物うき迄(まで)も秋も哉　露荷
灯(ともし)を(お)ま(ぜ)ず(ず)　乃雨(イヨツカ)　其角
樋(とい)を敲(たゝ)く嵐の窓(まど)の月(つき)　沈(シヅム)斎(サイ)　同

ちるく少霙(みぞれ)ふりつゞむ襖寒し　同
かゝら紙包ム摩(スル)墨(ボク)うるおひ　角
山寺の扇(あふぎ)をおもふ暮(くれ)の秋　荷
雲雀笠ぬぐ暮雪の起臥　角
新妻吟(ぎん)を折(おり)伏作(ふしつく)り　荷
乗(のり)あひの涙の旅(たび)の別(わかれ)　角
夕闇(やみ)の道(みち)ある馬(うま)の支離(ばらり)ふく　荷
吾(われ)やとも三石(さんごく)の菓(くだもの)　角
先(まず)獨(ひとり)もぬる人(ひと)をかこめ蚊帳(かや)　荷
酒(さけ)賞(しやう)事(じ)すり筆(ふで)養(やしなひ)の出(いで)　角
水ゆるく移(うつ)り上(あが)りし細(こまか)歩(あゆみ)哉　同

游翠の中あるの時の
夕月を怠惰(なまけ)て仰(あふ)がざりけるを
名残(なごり)惜しく戸を閉(とざ)す
夜寒さに妹(いも)が許(もと)へ電(でん)を窓
召(めし)よせ車小路(こうぢ)の粉(こ)ひきする音
御蓋(おんかさ)袴(はかま)を乃(すなは)ち着(き)て 初機(しょき)
甲方乃連(すなはちつれ)訪(だち)ひの大雨降(ふり)
さし掛(かけ)ると傘(かさ)を 祝(いわ)ひ 角
牛(うし)の如(ごと)へき残(のこ)り 雨
重九 三十九
名(な)ある花(はな)なき銭(ぜに)祝(いわ)へ菓(くわ)子(し)を 敝足

辛(から)洗(あら)ふ菓(くわ)杉(すぎ)もろく散(ちり)ぬ 同
菓(くわ)子(し)情(なさけ)春(はる)ありて秋(あき)もうれ 露沾
御蘭(おらん)生(お)ひ男(おとこ)あるかな菊(きく)あり 巴風
辛(から)〳〵の花(はな)籠(かご)島(じま)ゆるすふうとう菓(くわ)の菓 衛門
菊(きく)枝(えだ)を水(みづ)に折(おり)敷(しき)水(みづ)の香(か)や秋(あき)の菊 其角
いろ〳〵水(みづ)引(ひき)寄(よせ)て七百(しちひゃく)日(にち)師(し)を菊(きく)の酒(さけ) 岩翁
艸菴雨 其角
起(おき)あがり菊(きく)ほのうやや水(みづ)のあと 芭蕉
痩(やせ)なうらうらと菓(くわ)子(し)つゝむ哉 同

雨ま地よ這菊銭先打ん　其角
雨数日市かく歩あ社菓の茶　文鱗

旅切

蕎栗乃いがあらとも祝ふ礼　観水
蕎栗よ萱ふきうめる嵐う卵　透雲
むら雲甲斐ある坂や椎の音　岩泉
ぬる礼うらめや椎乃九折　三翁
茸ふる夕日御寺へ拾ひ　観水
童さへ拾ひ松茸みえ故白う卵　同
松茸や松よう園九誉の夢　孤屋

松茸や一日ふ乃雨の夢　三翁
京出内日
腹瞬きうふ乃茶弓　其角
かうもり馬蠅よ掃う夢　同
谷ふ里飴よふる茶弓　冬市

旅切
蠑書や櫛のくう杉乃藪　巴風
京神の夢や淀世乃村時雨　遊薄雲
峯ふ杉鰡あし　冬市

秋山二句
甲斐うも乃雲ふ秋乃夕哉　露沾

秋山や訪ふゆるうめ鞍の上　其角

閉門ヲ覓句ノ秋寒ク日土蜂ノ扉うち鳴ルよ垣の舟　三園

なのまさく菊終ルよ垣の舟　舟竹

秋盡

僧の入ル縄乃すれよ秋の昏　不炊

こゝろ寄まゝ行ゆくや秋ぞれ　一鐵

述懐

六容欲仙

乞食もかくの如きを責ムる虫よ蟾蜍鳴む音戔歩て　破笠

をの枝をよまきの此ゝ暗ニ　其角

月下いゆく柴の数　笠

此手をもつうめる暮の雪　同

心あるを思ふ秋のみぞれ　角

旅

人志ル〻す戀する亥乃上ほよ　同

別ゝて乃ゝと庵よ金むく　笠

名ゐうる名證をうぐひす馬よゝく　同

ゆうとあゝ〻妹よ多ぬう　角

鍋ぶうゝ〻筑ゞ六の市ようゝもん　同

色酒の世ま婀めく　笠

川あ手史焼ゝ波まゝう　同

少拾うゝ多ゐの稲磨　角

秋風や笠よ宿る天の下　同
松を産ん詩よ月　笠
米買ふ郎へ乗れ舟の雪　同
無常
夢のまかるや堂をさそはん　角
死出の烏乃端燭を喰　笠
とまる閨の捨子啼　同
おもひきり髪結　角
幕を躍らん花の夢　同
製
月冴て僧と漏る手水哉　笠
秋風や笠よ宿る天の下　同
松を産ん詩よ月　笠
米買ふ郎へ乗れ舟の雪　同
無常
夢のまかるや堂をさそはん　角
死出の烏乃端燭を喰　笠
とまる閨の捨子啼　同
おもひきり髪結　角
幕を躍らん花の夢　同
製
月冴て僧と漏る手水哉　笠

佛木どりて暁をおし
定めかねき義濃の谷紙衣納免　角
鐘撞よあそこ山　同
癩乃もよふ紀三井寺の世を悟り　笠
染の戸深く維摩ゆらん　同
乞食よ度舎ゆるす家の風　角
名乗うれき幣園をする　同
さ月待加茂の祭礼るかん　笠
瘡落ちと榊ゆふ手　同
かつらを軍の神み花折て　角
塔越ちのへくん大宮司ら畑　笠

不拘乃部

十月十一日餞別會

旅人と我名よばれん初雪　芭蕉

亦さくん哉木枯の心根　由之

鵙(カヤ)の音の聞ゆる程の山陰の　鶴

粮を分つ法師子(ホウシコ)規(スギ)てくし　枳風

かけあひく芝生の舞茸　文鱗

新しき舞茸月よまいちや　仙化

中の秋盡(ツキ)エ一法をかつるなり　魚兒

勞(スギ)てくし夢に漢(カラ)舟　觀水

後ノ三十四

秋風や次第に老(ふけ)る波のこゑ　全峰

齢も我も君うつす雲　嵐雪

酒のこゝろ盃とゝもに遠乃並(トヲノナミ)　執筆

卯月の雪をはらふ袂(タモト)の　翁

雛(ヒナ)つる袖つくはるゝ橋杭(ハシクヒ)　由之

蘿(ツタ)一面手の道ゆく里よ　其角

道ゆく里や啼んと泊瀬の篭人(コモリト)　枳風

月ゆや啼んと泊瀬の篭人　文鱗

篇(ツヾ)篇と句ひも都あつらへく　仙化

おもふ事ありて人を訓(ヲシ)ふ傀儡(クヾツ)　全峰

途中(ミチ)ふさぐ事を歎て巻を　翁

仲らく舟平ら
花少へ名残
別るゝ雁を
水の客去らうとせの外よ入
萱乃ぬけめ雪を燒家
老の身乃縄あの
雪流され
時雨を于潟の
命哉舟手這蟹
起出てよめる市寺哉
去らぬ市寺跡乃関も

由之　嵐雪　舉白　就水　仙化　由之　翁　舉白　キ角　嵐雪　就水

蕪や石も坂
小畑さりさ
艸の戸考る
つゝ星を
薫乃去あを面白
幟のそゝく
市牧雲の笛吹
僧くるりく
凡そ市と文字
堺の錦蜀
侘寐や寄虫
侘寐や寄虫

日いつほを
葉山ふ佛ん
酒債のおくら
妹よおーもる
氏の天王
歓声
腰手さゝ枝
子昂ヲ哮
を
へる
交りん

全峰　枳風　翁　舉白　仙化　其角　全峰　枳風　其角　嵐雪　就水

筏下出て
谷深き日うらゝかむの木目乃こ　翁
春来てなにやら人の住ありく　挙白
芭蕉庵主回郷
時うの冬芳野我つと　露沾
鳥巾を送る
もろ〳〵よりの奥乃頭巾哉　素堂
留主の中狩痩ぬ〳〵冬籠菊　不卜
木かしの吹りうろうろする哉　岚雪
ゐる千ゐ富まを尺くれ橋え坂　杉風
比〳〵春大井の流佐和の素　蚊足

指まて寄付てこゝまんをゐの雲　仙化
旅疲さう紙小二つ山ゐ庵　釈風
郭公毎夜紙小やおもき雲乃松　李下

　　茶下のすゝ毛をのく句あり

ぬさんあてゝ送りやさん時雨哉　文鱗
時雨〳〵に誕かりてきん帷乃庵　挙白
箱根山ちゝれるき日我影ひゝり　由之
蒲団借ス女もあり旅ゝ宿　露荷
萩折敷むつの紙絹こやこまで　沾蓬
宿ちれ家潰る間ち約束めセ　如泥
冬の月松ちてほれ哉　渓石

冬ごもりを思ひ着途中夜の雪　其角

詩歌文章をまなびてゐる

志ざし深づく雪に入日哉　杉風

眠てゐる翁よもてなす時雨汁　泊蓬

雪よりも先こほろぎ一つ哭れ哉　十來

よく〳〵さけの小よかきつめ時雨汁　蚊足

蛛の名乃破まよとゐる朽葉哉　冬市

蟬のうつまく〳〵薪集ひ山路哉　爲睦

片〳〵乃木葉集ひ山路哉　枳風

牛迫の歸〳〵行木葉哉　好柳

深川夜泊

木かくや夜の土鍋魚吹やうめ　李下

枳穴ありしいつくんの郎　巴風

冬牡乃人見よあまる瓢哉　同

松苗を枯葉手向る川辺哉　枳風

萱屋の伽あけ方冬木立　琴風

こゝ故しる僧とかくんの木立　卜千

甲斐山中

けふ宿る

刀さけくあやし紅雲乃北藏る　破笠

初雪や金こまる鐘の声　野馬

雪下りてせきふく寒き祇園哉　永中

吉寺北窓ニいくまぬ攬う郎　吼雲
芭蕉つま根盃の霜の壱盛　素堂

對客

我庵の窓ニくる月乃色　好柳
和好柳子

人をこん冬北をねも夕涼こ　其角
をの〻酒債(カテ)をの〻こ魚(ナ)賣　好柳
塩瓜牛羽(ナ)く鳧(ヒシ)乃杯うれく　由之

夜坐　一句

何となく多衾隣をこうれり　其角
うれこ史ま芋やくく人への薫(モノス)　同

ほの〻のうこ史杉こす浪う郎　紋水
門ちこく世間い寒しもつこ、　蚊足
炭こくむ音さん、氷こる史　嵐蘭
灯の影ニ新ニ水こひこる史炮式　魚兒
煙を綾(アヤ)ゟ命つこ絵ニ　似兮

炭竈とこくこ徑よむ法師式　不炊
茶花ゟ家ゟ家ゟ家ゟ家ゟ家ゟん　巴風

寒蝿

憎まれこ史こるこ人冬名槻　其角

法華を守侍こて

法ニ先こま親も無こ史炮式　嵐雪

髪おそや門通るまもみぢれ哉　景道

宿僧房

あるま野の一間(カ)のおまや冬菜(ナ)哉　其角

駒形や注連(しめ)うれうや寒き夕佛　三園

川風やわすれ草生ふ寒き夕佛　湖水

暁のつくはよるや空念佛　其角

星さえて五位一声や弐(ニ)さむき哉　湖春

麦活(いく)手深揃(ふかそろ)ふるもうれし哉　冬柏

水を乃(の)鉢(ばち)の跳(はね)よりるうねり哉　由之

あの男銭(ぜに)ま寝(ね)るう夕ちどり　山夕

鈴ゐ(を)る如(ごと)鷹(たか)ま晴(はれ)ぬる尾上哉　冬市

十二月九日ちかつ雪晩のうそひ

初雪や幸ヒ巻ン手紙　芭蕉

芳友人

君史をさけよ雪をんな雪まろげ　同

山荘の夕雪

雪手折(たおり)うち井ゆき小松原　露沾

落(おち)川や市に叫(さけ)ぶん雪ぬくま　沾荷

窓明(あか)り雨(あま)雪ふる夕ゐ　魚児

黄昏もうるる雪若(わか)うて　孤屋

友静亭にて

比良の雪赤鯨(くじら)より詠めけり　白悦

をよてこい小野へもゆで雪をみる　文鱗
もり鳥森許尽さー雪共くま　濁子
うす雪共破風ろうりつりる煙ろ多　自棄
初雪や月をたゞかる、篶竹ル　由之
雪沽公ろ共ろうもろく初雪
ろつ雪ろ盒ろ月ろうもろく詠哉　其角
ろ共朝雪ろんよもろく
日はさく鼓を雪あーた共　露沽
澁不ろつ物よほる炭　露荷
給綿張ル簗の竹をこころろく　其角
狹ヌ居ラ

二すぢとけさハまるん道雪　沽徳
ぐんくともれさる雪共江末ル　安重
幸清よぬるー雪の詠ろ郎　観水
ろ物やル乃雪石乃雪　救足
雪共歩や新先ツ雪共志ろ智　魚児
慶運り臟髏ヤ雪共芦　敗水
夜あしや衣桁を描ろ雪の雪　孤舟
初雪共風呂ニよろ風ろ夕ろ　仙化
白川や関ろ雪ろあるる雪共ル　東順
草菴
門乃雪掻ありやと訪まけり　其角

雪丸日や雪の日ばかりの道ちう　全峰
波のうへは雪あるの覗(のぞ)くる人ゝ　杓風
門のお傘(かさ)雪深く俳諧(はいかい)自慢なり　斧鉞
拂(はら)ひおよ笠もよめ入や雪霙(みぞれ)　鈎雪
徳倉の僧古ちくみそ材ぞ　コ齊
漫成五倫　露沾
君臣有義
家のまつりの松こそ氷とすれ　其角
父子有親
鯉汁や慳(つれ)なき兎(こと)も生(いき)ながら

夫婦有別
秋ながらさめおとりおめをを妻(つま)のも
長幼有序
袴着(はかまぎ)や小娘のまねをする
朋友有信
君ゝ我(わが)鴉(からす)をも返すなゝ
家毛(け)とあれせんさびる
節分
豆とりく我も鬼ゝん　野馬
市よ入ゝちく師を乞　素堂
よる夢を吸(すひ)ちらす　魚児

沾荷

雅亭新年
宝乃清正月のしるす和
子を祝ひ
羽子板をもて
詠をよむ方々
淋しき寺船
引あやつりまち
年のおや人
もりまあり市

紋水　露沾
如泥　文鵞
女師を共　杞風
孤屋　去来

閑

年の一葉王子の狐尾をゆん　素堂
晦日くや市今氏入て大晦日　蚊尺
月雪とすきもわけじ乃昏　芭蕉
年この晩
あれもさいりなる年の昏　其角

貞享丁卯歳霜月仲三日

蘇乃露

みつのとりの神秋乃月はさまでおもい
さのひとゆびおりてひとゆびおつる一おいの芭蕉
庵をたゝくあめおもあつ夏ふかく家ゝ
の芳花をうゝくひのうをもらす事りく家ゝ
のみめ清氣ことおあり也さらしでうこの
神こゝにまさをはまくく船河野山さゝなくく
て我さゝえんくゝ我うまゝ清ゝんうもゝうゝ
句こ集まてめいはくをはらもゝ表こし
こをゝいひある秋の初めよう老父いくく悩(ナヤミ)
つまゝうまゝうまゝうまゝうまゝ一家合

其角

秋ノ一

其角

其座

東順

其の主人を訪さはるまゝ七とせさまこと夜ふ
けの名残としきこえてもはゝそ伴なもしおてく
家ゝさめこのまゝあるころ　其角

信濃ふも老うるまありうふの月
とかく寺つゝけく病森をうめしく侍る
ぬ　東吹

ふと嫁と角づかくてうんすみ月
く鳴なと月のあうみうらみ業
百里ま牛鞍を磐み十里ま
三嶺ふ　ま　れも笑病く
ま遠ちおのなめてく　ふ燕す

ウ　名月八十歩を獨ゝ栞　其角
　　行ゝを　　仙化
　　跳踏ゝ多帝を萱う影ふて　嵐雪
　　おれふまゝ石ふ跳ふ河ふ市　神叔
　　梦の冥ナ石ふ跳ふ河ふ市　介我
　　葛菜を奇このす深度ふ水　枳風
　　庭僧の実度うけうまする　桃邨
　　た牛　鸛ま　格逍　完　幸隣
　　払う卅号をあうふ拔大新　鉄松
　　猿をふうと叶淨福陽の本　芝莚
　　鳧次う侍る苑をゆう亜　素イ

降りすさぶ雪を通して白雨
その爺を同じ人とは見ず
茶さゝ〳〵と沸くを聞き
門立の浮世を忘れ乃十二日
つゝけるに雫（ムク）の毛乃
小倉堤をゆく自
温飩（ウドン）濁酒（モロ）油揚（アブラ）腥（ナマグ）
お気うとくも指つゝの
饗ゆりめ面（ツラ）を
等閑（ナヅ）にうち掛ぎこひまる

平砂
可聞
萬巻
東風
其扇
神叔
桃隣
仙化
介我
萬巻
素イ

秋ノ巻

江ゟ
雲こそ
暁の
金を
ん
紅燭（ベンリ）掛て
大酒を
鼻息を
こ松の
おゝ〳〵脂（ニラミ）
いつ人よ
平砂
其角
介我
神叔
介我
方公
神叔
素イ
其角

梅梁の椎をかし
料理をさそふ人白雲宿坊
客よりて魅ふ作なすいふなかし
魚しお枝の華 肉椎
さていふ産業をなる蚊拂
主人のおもを動め意人
雙六手番をかなる勢
氣比於りめ三角のも
掾の下にはじ
特急飛ふなり 射白仕なり

介我
平砂
仙化
桃隣
萬巻
其角
平砂
素イ
桃隣
仙化
神叔

等ふ紡まく云ふ北斗、雲をまも
只佛り云を 盲 彈つ
為ることを 作る世の続
海を志ふ歳誠 身名亜
羽布乃巖 を世莽乃嘉
壱文の俗を
病ぬれ仮

平砂
其角
介我
素イ
萬巻
仙化

蕣乃井の梅紹ふの醤油搾
二年月まハ莽垣の出
日ハ夏ふ細実かけふ笠ふ

仙化
介我
其角

神叔　我を本ひとりを酒を呑まするやるとつふ掛をそ欲本打まろ
我　夕日も西るに亀のてろうを
化　買ふ斗を袖ふさしくる春の風
叔　かうさを忘八つ折檻を見る
角　俗ろを火ともゆるおもひ
化　俗を捨る世帯一ぞ仕習ひ
我　吐ちんいしくめも偶田川
角　荷ふ魚馬をを鳥帰りあり
叔　扎妻の子ぬけ小夜床の上
化　神祠さへ用心ろ連
我

角　足なくて大抵柚ノ伊勢参り
叔　ゆくへいなをくく人やりよる
我　捨てそすゝめるの月
化　解口の書初の
叔　白髪紙ぞ花の後
角　門ち北都うきへ春ろく
化　霞ろ本ふを母ぬ後
我　貧ぬのあるが風ろ
叔　解る日ちくろ
角　六月の暑さろ融雪

いつれの代よりか始まりけん
下毛野(アシモツケノ)国(クニ)安蘇(アソ)郡(コホリ)に
あれし人(ヒト)も葬(ホフ)りし塚(ツカ)
うづかうめ新(アラ)たに陸奥(ムツ)の国(クニ)
黄金(コガネ)産(ウ)出(デ)の事(コト)
新(アラ)たに宮殿(キウデン)を造(ツク)らんとて
嵐(アラシ)紛(マガ)ふ木(コ)の葉(ハ)をかき
掃(ハラ)ひ去(サ)れども尽(ツ)きせぬ
蝉(セミ)先(サキ)を見(ミ)せじと
をの象(カタチ)ありや急(イソ)ぎ
[illegible]

化叔
叔角
角化
化我
我化
叔叔
角角

八月十日
かうもりく三吟

蒲(カマ)や注(セン)なき菌(キノコ)の生(オ)ひ方(カタ)
蚤(ノミ)久(ヒサ)るゝ魚(ウヲ)ハ俎(マナイタ)番(バン)をおりて
帆先(ホサキ)を見(ミ)れども晴(セイ)ぬる月
服(ハラ)あしく田(タ)を植(ウ)ゑ残(ノコ)すらん
雨(アマ)ふらぬ店(ミセ)の半(ナカバ)蔀(シトミ)
何(イカ)の年(トシ)も変(カハ)らぬ石(イシ)の塔(トウ)
埋(ウモ)れ井(イ)よりもらし牧笛(ボクテキ)
史(フミ)なくて生(ウ)年(トシ)ならの男紋(ヲノモン)

神叔
其角
介我
叔
魚
我
叔
角
我

叔　独立うほんをおくり来びとよく人
角　更かくれかくるひとを迎ひ抱
我　経の声（タツシヤ）者八みれ法華宗
叔　姐（ネヱタ）てむうしん舎と料理方
魚　此海をうしう受海老を取
我　小統（ネヲヒ）もおうひる船や冬の流
叔　串（リン）指一買（フクメン）て村乃業内
角　肉巻とん覆面（フクメン）をいと茶の外
我　飯をいと世の風俗（タイ）や九りお
叔　るる糠（コヌカ）を移うしるおをやうう

我　添（カ）しさい号接の水よ牛濃（メ）て
叔　市の番の方俗く若狭
角　曝（サラシ）ふも号食くや文や少紀の番（ハリ）
我　歌まうてかく変態を悔
叔　燃（モエ）沸（サシ）をる所を見よる事を好
角　聖武月清うく室残る月
叔　西京のかさいすぐや華奢
我　儀うんおうくのほる大船
叔　放（ホウ）人先ツ舵（カヂ）んうく置（アミ）うり入（ル）鳥
角　の軽（カル）をて部多れず麦畑
我　飯屋を千部多れず麦畑
叔

永吐乳のつく極めて
ゆるさん妹(マヽ)葉芸を汚すをそ
荷の陰ふ手一日の陰(ニヽ)
二百文北人ことめまめ通
捧筆をめくし震む言種
八月十八日
病文んよーとみのいとも
海仲一ちホ法る湯引れ
人く金渡陰ふ(マヽ)ゆれも即真
身え
寺北身蒲萄(ブドウ)膳(ナベ)を薬(アヒヒ)ん

角 我
叔 角
我

其角

[illegible]ノ巻

粮指の葉(ナヘ)島くち海
郭書ホ虎(モガリ)銭のさめをはうみそ
ふやひこうはる川はの番
窓北毛銭曾高(アキヒト)う(ナヘ)ふ利牛
作粮を考ふ法対つきう鮫(サメ)
ふ考粮彷(ホウ)ホい散考ふ
乞食乃ふくる一名
麻ずこ波ホ永ふ粮自北夜ますう
北ふうあんすこ酒年白瓜
授ふ北駈しくふるさび刀
奥といふくふめをび呼めふ

固丈
孤屋
利牛
丈
角
牛
屋
角
丈
屋
牛

丈
角
牛
屋
角
丈
屋
牛
角
丈
牛

伏屋
牧原
霜の
おもて
娘と
四季
秋
焼
着
寛
戸
丈
角
屋
丈
牛
角
丈

梢ゑのこるいさうつゝみる祇園城　屋
　　射場の的をかなる片陰の蚊　牛
良夜吟　引附
五しきく名月あつまる水
名月や俗こと拂(コヲ)く猿の上　岩翁
そろ〳〵歩行見のまもる静(シヅ)こ　遠水
うるりまよふもの身ゑ舩　亀翁
　　恠(クワイ)ゟ病父(ヲ)一
又う月を閉(ヂ)めて中ゟうの身　彫堂
身為(ミヲ)くことひのあくしる蛍(スベリヒユ)蚊(スキ)遣　沾圃
笑月や吉ゟる人手松の透　松吟

月みつとゑ和泉式部もうらみぐ　秋色
　小萩のつゆのうさもうるみぐ
　なくしかこまくぶひちもくく
秋の朝や志(ココロ)ろ綾(アヤ)めり下女こいて　仝
名ごゝや曲(キヨク)ゑみす乙上の月見せ　探泉
名月や撫ゝ銭山ど氣ゑ　堤亭
城旅の彩やもゝこよひ　拙侯
こよひ粧月ハ潤(ニンヒ)笑ん女ん　山蜂
あゝも事ゑさうゝ袖ゑせめ月ぐ　子珊
名ごゝや童ゟうこ夜半ゑ　需笑
　　一習

名月やとまりも辞て帰る
みの月と旅へまさるものを名ふの月
　　色よしろ伯耆の
伯耆わめ宿の月見や五つ巴
名ところや栗嵐(リス)ト尾さらく蒲萄(ドウ)棚
月のうら手伯耆ほうら茶酒
椋人も皓をもつの都ろ月見
名ところや男すまわの雪取
名月や富士青ぐろ
名ところや一服もつくる湯の味
来給ふ月の名所(トコロ)や人のこ酒

至暁
青山

巨山
可明
桂花
西花
吼雲
白之
是吉
水谷

酒梅とこころみて帰る時を月の海
弥十宮ぬめ油売ほうれ月見茶
名ところや雪ぬ野ろ月見茶
名ところや一座ろ私
湖と石船かりうくつよみ
名ところや師と仰ぐる坊の昔節(コン)
名ところや雪所たよ枕。苔
名月や南ろ
雪雪ハ指本
名ところや月見
名月本(アヘ)饗(ソヘ)ん業(ソザ)ち昼席

節水」
和水
林也
雨夕
夏林
鹿山
池石
楓橋
冬鶯
鉄松
正春

名月や畳（たゝみ）も疱瘡をよろこべる
名月や座上の part 名を争ふほど
名月や膳（ぜん）に備りし水の上
名月や拭（ぬぐ）ふ蜘蛛の part 行を没（もうけ）る
名月や焼米（やきごめ）を噛む歯の part
名月や雑あまた書乃（の）part 誰とれ
盤掛（ばんがけ）名月座敷の part
名月や雪みん共（とも）め乃（の）庭の松
名月や辞（じ）けり〳〵と雨の脇（わき）
名月や鳴（なり）下（さが）れ〳〵ほどゝぎす
名月や人通りの part
名月や描（かき）のめされ part

残鳥
千崎
嵐雪
仙化
枳風
万巻
桃鄰
素イ
東湖
可聞
芝涯

名月や猫も瀬戸のうそあそび
名月や狐も赤やめをぬく
名月や扇の骨もうそ寒き
七十乃（の）毒も part 万楽（まんらく）
名月や蜆（しじみ）part
名月や蜆わく part
名月や通（かよ）ひ小舟つゝ part
名月や蛤をもて隷（レイ）part
名月や頂番の門と魚の part

平砂
幸隣
う舟
神叔
介我
固丈
利牛
孤屋

跋

其角七部集之一冊る
初刻の海ゝ連句を收めぬ
部類自在に晉る孔
ゝる処或書

天明七丁未年 仲冬日

東都書林

西村源六

中川藤四郎

菊舍太兵衛

鍵屋仁右衛門

野田治兵衛

皇都發行